

二-34

応用心理学論文集

[第1集]

[10] 11-13回 [14回]

日本応用心理学会大会

研究発表報告



日本応用心理学会

140.4
N77
V.11-13

目次

はしがき.....一

日本応用心理学大会

第十一回研究発表報告.....三

第十二回研究発表報告.....三八

第十三回研究発表報告.....六七

補遺.....九六

日本応用心理学会・関西心理学会

連合大会研究発表報告.....一〇三

はし が き

◆この研究抄録は、日本応用心理学会第十回、十一回、十二回、十三回大会で発表されたものである。その期日および会場はつきのとおりである。

- 第十回——昭和二十五年十一月 学習院大学
第十一回——昭和二十六年七月 千葉大学
第十二回——昭和二十六年十一月 東京学芸大学
第十三回——昭和二十七年七月 横浜国立大学

◆従来日本応用心理学会での研究発表報告は、教育心理研究、人間科学などに掲載されてきたが、戦争中あるいは戦後の出版事情のため、永い間中絶されていた。第十回大会の総会にはかり、その後のものをまとめて出版することとなり、委員をあげて準備をすすめて、昭和二十七年十一月、とりあえず第一回——第十三回までの「研究発表項目一覧」を刊行した。

◆総会の都度、会員によびかけ、抄録の提出を依頼したが、全部

をそろえることはできなかった。またなかには、制限枚数をはるかに超えているため、やむをえず削除しなければならなかったものもある。編集は、大会ごとに、通し番号をつけ、発表順に配列し、内容による分類は行っていない。

◆この報告ができ上るまでに、東京十仁病院長梅沢文雄氏からは刊行費にあてるための多額の寄附をいただき、出版については中山書店の好意を、また校正については川村短大助教授島田一男氏他の奉仕的な努力をいただいた。記して心からの謝意を表する次第である。

なお今後は、一カ年ずつをまとめて刊行する予定である。

昭和二十八年七月

編集委員

小保内 虎夫

鈴木 木清

松村 康平

第十二回大会 昭和二十六年十一月 東京学芸大学

乳児院児の精神発達

竹田俊雄
芝田敬一

研究の目的 この研究は乳児院という生活環境にある児童が、一般家庭にある児童と比較して、その精神発達にどのような特徴があるかを見ようとした。

研究の対象 対象とした児童は某乳児院およびそれに続く養護施設の児童九二名で、この年齢別内訳は次の通りである。

零歳児一、一歳児一二、二歳児一三、三歳児一二、四歳児一四、五歳児一。

表 1

D. Q.	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100	110	120	130	140
n	9	19	29	39	49	59	69	79	89	99	109	119	129	139
%	0.0	1.0	0.0	3.3	4.3	13.0	12.0	12.0	20.7	12.0	6.5	8.7	4.3	2.2

一、精神発達指数 (D・Q) の分布は次の通りで、その平均は 80.5±19.7 である。

表 1

C. A.	0:0	0:6	1:0	1:6	2:0	2:6	3:0	3:6	4:0	4:6	5:0
n	3	8	15	7	14	9	13	8	7	7	1

表 2

D. Q. の平均	97.0	89.5	59.1	87.3	76.0	69.9	71.2	85.5	104.6	106.7	118.0
-----------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------	-------	-------

表 3

入所年齢	0:0	0:6	1:0	1:6	2:0	2:6	3:0	3:6	4:0
n	47	18	7	6	4	2	3	0	2
D. Q. の平均	71.2	80.4	83.9	96.3	95.5	116.0	108.7	0.0	117.5

(* 印再入所した3名を除く)

なおこの結果と対照するため、

他の乳児院および保健所に来所した一般家庭の児童についても、同様の調査を行った。

研究の方法 愛育研究所編乳幼児

精神発達検査(簡易検査)を用いて、

精神発達を測定した。測定者はこの報告者兩名および助手二名、測定の時日は昭和二十六年九月上旬より下旬にわたっている。

調査の結果

一、精神発達指数 (D・Q) の分布は次の通りで、その平均は 80.5±19.7 である。

二、生活年齢によつて D・Q に著しい差異が認められ、乳児期のはじめは発達が普通であるが、一歳の前半

表 1

二、生活年齢によつて D・Q に著しい差異が認められ、乳児期のはじめは発達が普通であるが、一歳の前半

三、この乳児院(養護施設を含む、以下同様)に児童が入った時の年齢が何歳であったか

四、この乳児院に児童が生活している期間の長短による D・Q の差異は、在所期間六ヶ月未満のものは発達

五、発達の遅滞は、坐る(一歳前半 66.7%)、はう(同 46.7%)、立(同 13.3%)等の運動機能の面においても見られるが、摸倣して机をたたく(一歳前半 20.0%)、二語を話す(一歳後半 57.1%)、命令の遂行(同 57.1%)、位置関係(三歳前半 15.4%)等の社会性の面において、殊に著しく認められる。

総括 乳児院の環境は早期に入所するほど児童の精神発達に著しい影響を与え、その影響は入所後しばらくしてあらわれ、一歳児にもっとも強く認められ、殊に社会性の発達を遅滞させる。なおこれについては同一児童について更に継続的調査を要する。

乳幼児の精神薄弱に関する研究 社会性に関する考察

この報告はその一、「精神医学的考察」とともに、愛育研究所員、平井信義らと共同して、本年十月より開始した継続研究の第一報である。現在、なお進行中であるから、ここにはその概要と現在までの結果を報告する。

問題 精神薄弱児は、多少とも社会性の面でもおくれ

表 4

年 所	0:0	0:6	1:5	1:6	2:0	2:6	3:0	3:6
n	15	8	19	9	11	11	14	2
D. Q. の平均	96.9	73.1	73.8	80.1	76.5	77.5	77.3	98.5

(* 印再入所した3名を除く)

が普通であるが、それ以後のものはほぼ一様に遅れている。

五、発達の遅滞は、坐る(一歳前半 66.7%)、はう(同 46.7%)、立(同 13.3%)等の運動機能の面においても見られるが、摸倣して机をたたく(一歳前半 20.0%)、二語を話す(一歳後半 57.1%)、命令の遂行(同 57.1%)、位置関係(三歳前半 15.4%)等の社会性の面において、殊に著しく認められる。

総括 乳児院の環境は早期に入所するほど児童の精神発達に著しい影響を与え、その影響は入所後しばらくしてあらわれ、一歳児にもっとも強く認められ、殊に社会性の発達を遅滞させる。なおこれについては同一児童について更に継続的調査を要する。

乳幼児の精神薄弱に関する研究 社会性に関する考察

この報告はその一、「精神医学的考察」とともに、愛育研究所員、平井信義らと共同して、本年十月より開始した継続研究の第一報である。現在、なお進行中であるから、ここにはその概要と現在までの結果を報告する。

石井哲夫
玉井収介

問題 精神薄弱児は、多少とも社会性の面でもおくれ

問題 精神薄弱児は、多少とも社会性の面でもおくれ

を示すものであるが、その程度に必ずしも知能のおくれと比例しない。これには、種々な解釈が成り立つであらうが、われわれの目ざすところもまたこの問題である。

手続 生活年齢七歳以下の精神薄弱児四〇余名に対して、社会性テスト、知能検査その他各種のテストを併用した。使用した社会性検査はドルのヴァインランドスケールを根幹とし、これに中島式検査や、山下俊郎氏の基本的習慣の表を参照して作成した。なお、観察とインタビューとにわけ、直接観察できる項目はそれによった。

結果 ドルの分類による八項目にわけて整理し、正常児よりなるコントロールグループと比較した。詳細な比較は略する。

将来への見通し この報告はなお研究継続中のものであるから、最終的結論は別の機会にゆずるが、社会性の各方面における発達の相違と、家庭のしつけ方の関係などにも発展せしめる予定である。

綴方作品にみる心理学的諸問題

世 良 正 利

ここでは作品集「山びこ学校」における子供たちの主として人格形成の問題をとりあげる。

(一) 「山びこ学校」における教育実践の諸成果は一般化されなければならない。

一、その業績が、ただ一山村における特殊な教師によるものだと特殊視されてはならない。一般化するとは次にのべる(二)、(三)の問題によって必要でもあるし、また可能でもある。何故か。

二、人間は社会的なしかも目的意識的な存在である。その人間として自然なかたちでいとなまれた教室から「山びこ学校」の諸成果が生みだされている。

(二) 「山びこ学校」にこそ今日の子供たちの実態を見ることが出来る。それは、

一、子供たちを一定の方向にみちびくという目的意識的な教育の過程で、子供たちを見てゆき、子供たちを見てゆく過程のなかで、子供たちを教育しているという点。

二、子供たちの個性
人格における個別的なものは、一般的なものな
かでのみ、その輝きをますという点。

(三) 子供たちの人格形成

人格は、外的諸条件に対する適応においてではなく、日常の実践で何をめざしているかにおいて把握される必要がある。

一、問題点の発見

1 教師のはたらきかけの中で、生活のうちの何が問題点かをとりあげている。

2 しかもその問題点の克服を可能な方向に求めようとしている。

二、経験主義の否定

人間は社会的存在であるからまた歴史的存在でもある。過去の先人の諸経験は蓄積され、一般化される。子供たちは自分らの生活経験をのりこえてこの蓄積され、一般化されたものを、教師のはたらきかけの中でうけとらなければならないし、またうけとることを求めている。

聴力の発達に関する一研究

田 中 鉄 也

一、研究目的

音響の強さに対する感受性である聴力に、発達現象が如何に見られるか。

(1) 測定器械は、KYS聴力計を使用する。被測定者

は、六歳より二十歳に至る男子二〇一名、女子一八七名、計三八八名である。

二、考 察

(1) 聴力の発達は、右耳聴に於ては、男女とも十二—十三歳の間に、発達の頂点に達し、それ以後は、聴覚度指数は漸増する(聴力が衰える)傾向が見られるが、女子では十一—十二歳に於て指数が二・〇で、十二—十三歳の聴力と殆んど変りがない。

(2) 左耳聴に於ては、男女共に右耳聴と同様に、十四—十五歳に、その頂点に達し、その後は衰退する傾向が見られる。

(3) 左右平均聴では、大凡男子では十二—十三歳、女子は十四—十五歳に於て、その頂点に達する。

(4) 十八—二十歳に於ては、左右耳聴とも、女子の低下は、男子よりやや著しくなる傾向がある。

(5) 男女共に十二—三歳頃が聴力の最大発達に達しているのは、青春期の諸問題と何らかの関係があるのではなからうか。

(6) 視力に於ては、利き側(右利・左利)が存在する

かどうかは疑問だといわれている(藤田、佐武氏による)が、聴力に於ては、私の研究では、右耳聴が左耳聴に優るといえる。

三、反省及び今後の研究指針

(1) 発達を考察するには、私の測定では、結論を出すには被験者が少な過ぎるのではなからうか。それと共に、被験者の質を十分考慮に入れねばならない。

(2) 聴力計より発する断続音は音響の一部であるから、実際には、他の測定法も併用し、総合的に、聴力の発達をなぐる必要がある。

(3) 利き耳と、利き手、利き足、利き目(これの存在は疑問とされているが)とに、果して如何なる関係があるか。

(4) レシーヴァー(聴力計の)を変えらるることによって、

隻耳聴のみならず、両耳聴をも測定して、種々の考察をしたい。

戦後の学童の精神発達

——智能検査成績についての

最近数年間の連続観察——

中 村 陽 吉

我々は昭和二三年以来東京都港区立T小学校を対象校として学童の精神発達の状況及びその規定因子について、若干の考察を加えて来た。本報告はこれらの資料中、智能検査成績のみについての報告である。対象は上述T校の三年—六年生（二六年度は四年—六年のみ）男女児童延約三、〇〇〇名であり、実施した検査は二二—二五年度は田中B式智能検査短縮版であり、二六年度は新制田中B式である。実施時期は、毎年六月上旬であった。上述の手続により得た結果は次の通りである。

二三年度の各学年の成績は全般に低調であり、昭和一年頃の資料で作制された田中B式全版の標準成績と比較して男女児共かなり低い。（この差は五%以下の危険率で統計的に有意である。）

しかるに昭和二四年度の各学年の成績を見ると、三年生を除き各学年は男女共標準成績と略同水準或いは多少上廻る程の上昇を示している。これを更に二三年度の成績と比較して見ると各学年共すべて可成りの上昇を示している。（この差は三年女児を除き他はすべて五%以下で有意）二三年から二四年への各学年の成績上昇率は三年男女が一番低くなっている。かかる結果を生ぜしめた要因としては仮説的に次のようなものが考えられる。即ち一年間の間隔で同一検査を同一学童が二回受検した事による検査への経験効果と、戦後の逐年生活水準の向上（経済的、文化的）による児童の精神発達の促進の二因子である。二四年度の四、五、六年生は二回目の受検

であり、二三年度の各学年及び二四年の三年生は初回である。而して上述の如く二四年度の上昇率が他学年に比し三学年が低いが、然し、各学年とも二三年度より上昇している事実は上述の仮説と矛盾しない。

然るに二五年度の成績を見ると二四年度に比し、かなりの上昇を示した学年と殆ど上昇を示さない学年とが相半しており、更に二六年度の各学年の成績を見ると、二五年度に比し上昇傾向を示しているが、殆ど同水準と云って大過ない程度である。（この差は五年の女児に於てのみ五%以下で有意）この事は若し上述の仮説に於ては大いなる過りがないとすれば、検査の経験効果は、初回—二回では大であつても、三乃至四回と回を重ねた場合はその回数に応じて効果が増大してゆくという程のものでなく、又、生活水準の向上の効果も世情の安定と共に二四—二五年度迄でその頂点に達したのではなからうかと推定される。

経験効果の問題は暫くおき、生活水準向上の効果の仮説については共同研究で得た身体発達に関する資料、或いはまた戦後の逐年経済指数等々の資料の結果と比較検討する事によって今後考究を続ける積りである。

児童の希望について

——特に教師に対して——

田 中 敬 二

目的 よい教育はより本質的に良い教育者によって行われねばならぬ、と云われている。それ故教育者に対する資質の面に対する研究及び調査は従来よりしばしば行われその成果を発揮して来て居る。従来行われて来た方法をみると、ドイツ流の演繹的方法と、アメリカ流の帰納的方法とがある。ドイツ流の方法はこゝでは省略し、アメリカの帰納的方法には、(一)生徒児童の立場から、(二)教育者を監督する校長、及び教育行政官、及び管

理者の立場から、(三)父兄並びにその地域社会の人々の立場から、(四)教育者の自己省察から、(五)人事課に記録せられた教育者の資質を蒐集分類したものの等から考察されて来ている。私は、アメリカで行っている Qualities of Good Teachers を決定しようとするのに学童の立場からみた面を重要視しているの鑑み、Bell, 1896年の行っている方法を参考にして調査を行つていった。Bellは「よい感化を受けたと思う教員と悪い感化を受けたと思う教員」という題目で調査している。彼は中等学校及び高等学校、大学生に行つて居るが、その方法を少し改訂して、私は小学校及び中学生に先ず実施し、漸時高学年に進みたいと思つて居るが、その小学生及び中学生すらまだ完全に行われない状態で真に遺憾である。

方法 教員の資質の面を大体教師自身の知識及び教養の面と性格及び学習指導の三つに大きく分類し、その中を更に細部に分類して問題を四十三問題作製し、質問紙法により実施した。その中で知識の面では、良い面のみ三問題とし、性格の項では望ましい性格と望ましくない性格と、生徒の判断に於いては疑問の出る様な三種の問題十七題を提出した。学習指導の面では十七題提出し、これも性格と同じく三種の問題に分類して出題した。その他教師の性別及び年齢に対しても児童は如何にみているか、この方面に就いても調査を実施した。

調査期間 調査期間は大体昭和二十六年八月より十月迄の短期間であつたが、これからも継続して行く積りである。

調査結果 調査結果は全て都市の児童に限定せられその地域的差が見られなかったのは残念である。但し学年別として小学校（五年及び六年）、中学校（一年及び二年）別が見られ、性別の結果も分類出来た。資料そのものを此処に発表出来ないのは残念であるが、我々教師としては随分反省せられる点が見出される。細密な結果報告は学会に於いて報告する。

Small group における幼児の 社会的行動に関する実験的研究 (第二報告)

田 中 熊 次 郎

一、附属幼稚園幼児を被験者とする三回の実験の結果の一部を報告する。(一九五一年の二月—三月、五月—六月、十月—十一月)グループはすべて男女別、(1)三人グループ(Random)のぬり絵・絵本・双六等のPlay situation、(2)特に選ばれた Aggressive, Defensive group の双六、(3)五人グループ(Random)の双六・積木・自由画、(4)選ばれた Ag. Def. group の双六・積木・自由画。

二、実験はすべて、一定の Play-room, Directions, Tools 等の条件で、One-way-vision-door, Amplifier 等の設備のある Observation-room より、実験者が観察し記録した。一グループ一回の play は十五分間。

三、二月から十一月までの実験を通じて、Small group 内で発生した「争い」の頻度は、(1)男児は、何れの場合でも女児より「争い」が多い。(2)Play situation では、三人グループの場合、ぬり絵・絵本・双六の順に、五人グループの場合、自由画・積木・双六の順に「争い」が多い。特に、女児の選ばれたグループでは、自由画の場合、「争い」が殆ど見られなかった。(3)双六の Play situation のみで、三人グループ(78)平均 6.74、五人グループ(37)平均 6.05 となって、後者の方が「争い」が少い結果となった。

四、Small group 内における幼児の社会的行動の変化をみると、(1)如何なる situation においても Aggressive behavior、(2)Random group では Aggressive Aggressive group、(3)如何なる situation においても Defensive behavior、(4)R. g. では

D. b. を示し、D. g. では A. b. を示す、(5)R. g. では D. b. を示し、D. g. では明るく元気となる、及び、(6)Play situation によって、社会的行動の変化するもの等の類型がみられた。

五、Small group 内における集団気候(group climate)としては、(1)ねたみとくしみ、(2)「争い」の連続、(3)我がまま勝手な bossive leader の支配、(4)Sub-group への分離(Solitary, Fringer, Rejection)、(5)生気のない場(Silent, Anxiety)、(6)明るく元気な場(Singing, Dancing)、(7)仲よく協力する場(Cooperative play, motivation of Drawing)等が見られた。

効果の波及と学習者の構え

辰 野 千 寿

目的 Thorndike が一九三三年、効果の法則を支持するために提示した効果の波及(Spread of effect)現象は、その後多くの人々によって実験的に吟味され、Thorndike 効果(Thorndike effect)と呼ばれてきた。

しかし、この現象については、実験的にも、理論的にも、なお未解決の問題が残されている。特に学習者の構えは、Hilgard なども指摘しているように、この現象を左右する条件ではないかと思われる。そこで、ここでは学習者がこの実験に対し如何なる構えをとるかを分析し、それと波及現象との関係を見出そうとする。

方法 従来の方法と同じく、コホ、ヨト、というような無意味綴りの系列を(一八個)を順次提示し、(一語三秒の割合)、これに対し一から九までの数字を一つずつあてはめさせる方法を用いた。そして刺戟語の五番目と一四番目のものに対しては、その反応数字の如何に拘らず、すべて「正しい」といふ、その他の刺戟語に対しては、答の如何に拘らず「間違」という指示を与えた。このような手続を一五回くりかえし、その後で、被験

者の内省を求めた。

被験者は大学生と中学生一三人であった。

結果 反応の反復は次のように計算した。即ち、n 回目の試行に起る反応が (n+1) 回目の試行で反復されたときにのみ一反復とした。

上述の実験によると、学習者の態度としては、大体次の三つに分類できる。

- (1) 一定の規則を以て数字を反復しようとするもの。数字でこの点を注意したにも拘らず、どうしてもこの傾向をとる被験者があり、これは省いた。
- (2) 「正しい」といわれた刺戟語の直前とか直後、あるいはその両者に注意し、そこから覚えようと努力するもの。
- (3) 特定の意識をもたないで、始めから試行錯誤的に数字をいっていくもの。

これらの構えの型になって効果の波及を整理してみると、(1)の場合には、Thorndike 効果はみられず、(2)の場合にのみ見られた。

したがって、効果の波及の問題を検討するときには、学習者が如何なる構えで実験に向ったかを吟味することがまず必要である。

安定・不安定、完成・未完成と

記憶の実験(その二)

渡 辺 秀 敏

よい形をもつ痕跡と緊張を担っている痕跡との想起に於ける優位性を研究する手がかりとして完成・未完成作業をとりあげた。その中第一実験(関西心理学会にて発表)につづいて中学生の書取帖より十語、新聞用語より十語採上げて、その半分の語の最後の一字を取除いた不完全な形で提示し、これを記録的態度で記憶させ、後に再生させて完全な形の語の再生率と不完全な形で示され

国語・算数での学力遅滞児の%

遅れの度合		一年以上	二年以上	三年以上	四年以上
国語	7年	33%	7年 19%	7年 10%	
	読字	6年 26%	6年 15%	— —	
	書字	5年 31%	— —	— —	
	語彙	平均 30%	平均 17%	平均 10%	
算数	8年	35%	8年 27%	8年 13%	8年 6%
	7年	36%	7年 23%	7年 11%	— —
	計	6年 31%	6年 15%	— —	— —
	知	5年 22%	— —	— —	— —
	識	平均 31%	平均 22%	平均 12%	平均 6%

A Survey of Remedial Reading Practices in Junior-High-School Level.

1) Here is your remedial reading program organized Describe your method of handling retarded readers.

- | | | |
|--|-----|-------------|
| 1. Corrective reading class | 29校 | } 48校 (60%) |
| 2. Special English section | 19校 | |
| 3. Small teaching groups | 10校 | |
| 4. Individualized instruction with in a heterogeneous English or reading group | 7校 | |
| 5. Individual teaching | 4校 | |
| 6. Remedial instruction in each content subject | 4校 | |
| 7. Fused course in English and social studies | 3校 | |
| | 80校 | |

2) What preparations and qualifications do your remedial Teachers have?

- | | | |
|---|------|-------------|
| 1. Some special work in remedial methods | 37校 | } 43校 (40%) |
| 2. Specialization in remedial methods | 3校 | |
| 3. One course in remedial methods | 3校 | |
| 4. Study of developmental techniques in reading | 16校 | |
| 5. Professional reading and Conference on the subject | 6校 | |
| 6. An English major or English teacher | 28校 | |
| 7. A master's degree | 13校 | |
| 8. Work toward a Doctor's degree | 2校 | |
| | 108校 | |

Specific Courses in Diagnostic and Remedial Teaching

- Principles and methods in remedial reading
- Diagnostic and remedial work in arithmetics
- Diagnostic and remedial program of the school
 - Section A——for elementary-school teachers
 - " B——for secondary-school "
- Practice of diagnostic and remedial Work

た語の想起率を比較して見た。提示時間は一語五秒、提示後十分、四十分、一時間四十分、二十四時間の四回再生を行った。その結果、第一・二再生に於ては第一実験同様両者の想起率には有意の差は見られなかった。併し第三・四回再生となると完全語の方が優位(五%の有意水準)を示している。これはツアイガルニツクの結果に於て二十四時間後に於てツアイガルニツク指数が一になったのに比して著しい結果が見られた。これは中学生を被験者とした為に中学生にとっては不完全語は無意味語に機能的に近いという刺戟価値を持つたためではないかと思われる。この結果はなお刺戟語の選択並びに提示方法に於て吟味の上継続しなければならぬ。学習者に経験

的準備状態を作ってから刺戟語を呈示する方法によって第三実験を実施中である。

学習診断と治療の問題

橋本重治

(1) 国語の諸能力と算数に於ての諸能力の学力遅滞の状況を調査して別紙の表の結果を得た。これで見ると国語的学力でも算数的学力でも、大体に於て、その学力が一年以上遅滞している者が全体の約三割、その中約二割は更に二年以上遅滞し、更にその中約一割は三年以上遅滞し、更にその中の何パーセントはもっと遅れてい

るように察せられる。

勿論かかる遅滞の原因としては、精神能力的要因、身体的要因、教育的要因等が考えられ得よう。

(2) かかる学習困難の診断治療については、我が国に於ても、明治以来その研究の必要と或程度の業績は示されている。

(3) 然しながら、例えば、この方面に関するアメリカの理論的研究と実地の進歩に比ぶれば、殆んど未着手に近いであろう(別紙資料参照)。

(4) 学習臨床の研究が今後教育心理学の一つの研究領域としてもっとも注目されてもよからう。

運針学習の研究(第二報)

——主体的条件及時間配置の問題——

藤原勉

当実験は、前会の統報で、運針学習進歩の基礎的主体的条件と、学習能率の効果的、實際的時間配置の問題を考究し、運針学習指導上の具体的指針を得んとするものである。

「対象」第一表の如き実験群に異なる練習時間をもって、六月一八日—七月二一日間実施した。

「材料及び手続」前会同様で、練習期間中その都度記録をとり、最後に各組共五分間の運針検査を行い、その速度及び質の調査を試みた。

「主体的条件の方法」は次の要領に基ずいた。

(一)、智能II団体智能検査を集团的に施行。(二)、運動技能II(単純運動速度)一分ずつ三回小憩の打叩検査にて、その最高を記録する。(調整速度)鏡映像描写器にて五回練習、各回所要の平均時間をとる。(三)、思考作業力II精神作業検査を五分連続、全作業量と誤謬の差とする。(四)、力量II(握力)握力計にて三回実施、最高を記録。(指頭屈伸力)エルゴグラフによる一分間の仕事量をもって、何れも右手、座位にて行う。(五)注意力II四—九桁の数字一二個を、万能露出器にて一秒一刺戟で呈示、刺戟と答の差の絶対値の合計を、注意力の誤謬とする。(六)、反応動作II落下反応検査器にて五回反復、落下距離の平均をもって反応速度とする。これ等は九月初旬—一〇月下旬に実施したもので、何れもそのS・Dをもって優劣を定め、運針構成要素との関係を調査した。(七)、内的動機づけII(好嫌と成績の関係)I—五段階尺度の質問紙に自己評定させ、(心構え)I意識を質及び量に集中せしめて二分検査を行い、又同じ一分検査に對して、教示を二〇分と一分練習とした場合について測

定した。

「結果」(一)、運針学習に於いて、量的には短時間頻回練習が秀れ(第一区)、質的には長時間練習が優っている故(表省略)、質を重視する實際面より、長い方が良く、併も量へのWeightを考慮せば、六分—一二分の隔日練習が、より効果的時間配置であることが示唆される。(二)、運針成績を左右する主体的条件としては、生得的能力は認め得ず、結局は各自の経験的所与、即ち正しい運針学習後の練習にあると思われる。而してその機能的力量との関係はないが、反応動作及び注意力とは幾分積極的相関を有する(表省略)。(三)、運針の好嫌と成績の関係は明瞭で、興味による学習への促進性を示し、併もその心構えの配置如何が大きな影響を与え(表省略)、主体的条件として、内的動機づけは欠くべからざるFactorをなしている。

第 1 表

組	練習時間	在籍数
A	毎日(6回) 2分	43
B	毎日(6回) 6分	40
C	毎日(6回) 12分	41
D	毎週隔日(3回) 2分	40
E	毎週隔日(3回) 6分	37
F	毎週隔日(3回) 12分	35
G	毎週1日(1回) 2分	43
H	毎週1日(1回) 6分	45
I	毎週1日(1回) 12分	39

英語学習の心理学的研究(II)

—和文英訳に表れた誤謬の類型—

永沢幸七
小保内虎夫

目的 英語学習の能率をあげるには、如何にしたらよ

いか、色々の角度から研究することができる。この研究は主として本邦学生の和文英訳に表われた誤謬の類型を檢討することによりその原因をたずね、これを基として学習指導を行うことにより学習の能率をあげようとするものである。普通、我々が外国文を綴る場合日本語的な考え方による語を用い、日本語に特有な語法によって構文することが避けられない傾向である。こゝに所謂日本語流の英語が生ずる所以である。しかし、たとえ外国語らしくないものであっても、それが文法的に誤りでない限りは別に差支えないものかも知れない、ただこのような日本語法化はしばしば文法的誤謬にまで導き外国語を習得する上に障害となることにおいて大きな問題がある。吾々はこのことを考えて和文英訳の誤謬を明かにしようとして企てるものである。

方法 調査方法としては、和文英訳問題十二題を学生に課して英訳を行わせた。各問題毎に六箇の課題が含まれるようにした。すなわち、(1)日本語法化からの錯誤、(2)語順からの錯誤、(3)日英文法の相異による錯誤、(4)肯定否定の表現差異、(5)英語的表現法の未熟、(6)分析的表現と総合的表現の差異がこれである。被験者は都内某高等学校三校—合計約六〇〇名、一年より三年まで、又都内某私立大学二校、一年から三年まで約五〇〇名である。

結果 まず結果の概観を与えるために、すなわち正答数の人員分配を示すと第一表のようになる。まず問題全般を通じて最も多く誤るのは肯定・否定の仕方のとり違え、日本語法の錯誤により客観的人称(第二人称、第三人称)を用いない傾向、語順の錯誤による誤り、又 tense の不一致等であつてこれが大体三%である。これについてつぎの誤りは前置詞の誤り、主文従文の人称のくい違い、全体否定、部分否定の不明なるものなどで、これが一〇%位であり、最後に助動詞と本動詞との並列、また前置詞の省略、人称の不一致など三%前後である。此等の誤りをさらに正文との類似度に従い分類して分析を進

めつゝある。

中・高校生徒に職業興味調査を実施した結果と、調査票の改訂について

小松 信重

ジャマイカの職業興味調査票を日本化して協会で発行して以来、今日まで数度の改訂を行った。一九五〇年五月、中学校一〇校を選んで、計三、二二〇名の生徒に実施した結果については、「職業指導」誌同年六月号に発表したとおりであるが、この調査とその後の実施者からの意見などを参考にして、一九五一年四月つぎのような点について改訂した改訂版を作った。

- 一、一つの問題文中に、二つ以上の仕事の含まれていないものは、これを一つの仕事にした。
 - 二、同じような問題文が二つ以上の職業群にあらわれないようにした。
 - 三、日本人の生活経験に近い問題文にした。
 - 四、生徒の学校生活の中から取材するようにした。
 - 五、抽象的な問題文は具体的にした。
 - 六、価値的言葉を使うことをさけた。
 - 七、用語を平易に中学一年でも分るようにした。
 - 八、どの職業分野の興味を調査されているか、わからないような表現にした。
- さらにこの改訂版を六月に、中学・高校生計五九〇名に実施した。その結果は表一、二、三のとおりで、この調査により、つぎの諸点を改訂して現在の第五改訂版職業興味調査票ができた。

- 一、各職業群とも五問題文ごとに、好きな応答の頻数がほぼ同一になるようにした。
- 二、五問題文の配列の順序は、頻数の多いものから配列した。

三、似ている仕事や作業は、なるべくはなして配列した。

四、中学・高校男女各学年五三一名の得点別頻類表から、 $M=12.8$, $S.D.=+7.8$ をえ、つぎのような品等段階にした。

- 20以上=A(大いに興味がある)
- 8-19=B(興味がある)
- 7以下=C(余り興味がない)

この第五改訂版を十一月一日学芸大学附属竹早中学二年男女一〇八名に実施した結果は、品等別百分比も大体好ましい数値をあらわしている。

これらの調査の結果、職業興味年齢段階による差異、性別による差、中学校と高等学校の生徒の差、都市と農村との地域による差などがある程度見られる。

今後さらに多くの研究と、調査と、実証とにより、一歩一歩有効なものとしていきたい。

中学生の精神作業検査について

赤塚 泰三

一、問題

新制中学校の生徒は、精神作業においてどんな成績を示すであろうか。旧制中学との比較如何。又大人に比べてどの程度の到達度を持つであろうか。先ず量的並びに質的方面の分析をしようとする。

又、精神作業は、向性とどんな関係を持つかを明らかにしようとする。

二、検査

日時 十月二十三・四日、午前—午後

対象 東京都南多摩郡鶴川中学校生徒全員

用紙 クレペリン、内田精神作業検査用紙80型

田中向性検査用紙

三、結果

(1) 作業量について

男子、女子の平均作業量は次の如くなる。

	男子			女子		
	一年	二年	三年	一年	二年	三年
休憩前	二六・八	二五・五	二八・四	二九・二	二八・四	三二・四
休憩後	三〇・三	二九・二	三二・一	三三・〇	三四・三	三八・一

(1) これにより中学生では、女子の作業量は男子のそれに常に優ると云える。男子では一年はむしろ二年を凌ぐ。三年においてはやや進歩するようである。

女子では学年の進むに従い逡増する。

(2) 作業の質について

(1) 休憩効果率は、次の如くなる。

	男子		女子		旧制中学
	一年	二年	一年	二年	
一年	一一・二二	一一・二二	一一・一六	一一・一八	一一・一八
二年	一一・二四	一一・二四	一一・一七	一一・二〇	一一・二〇
三年	一一・一四	一一・一四	一一・一七	一一・二二	一一・二二

(2) これにより女子は男子を凌ぐと云える。但し旧制中学生に比べて低い。

(3) 誤謬率は、次の如くなる。

	男子		女子	
	休憩前	休憩後	休憩前	休憩後
一年	〇・〇一一	〇・〇一三	〇・〇一八	〇・〇二二
二年	〇・〇一八	〇・〇二二	〇・〇一九	〇・〇二四
三年	〇・〇二三	〇・〇二五	〇・〇二一	〇・〇一九

(4) 女子三年を除いて、休憩後の誤謬率は何れも増加する。男子は一般に女子より誤謬が少い。但し男三年の誤謬は最大である。

(5) 判定型について

男女共定型は極めて少い。男子は約七%、女子は約一五%にすぎない。準々定型以上は、男子は約四〇%、女子は約五〇%となる。これ以外は低格者か異常に近いものがあると考えられる。

(四) 作業段階について

優良・可・不可・異常の五段階において、男女共不可に属する者が最高率を示す。異常者は学年の進むに従い減少している。このことは、中学生の作業はまだ大人並に及ばないことを示している。

以上を要するに、新制中学生の作業が、旧制に比べて低いということは、一般に学習の低下を示すものと云えよう。直接の原因は知能の低いということと、基礎計算の習熟ができていないことであろう。

四、精神作業と向性との関係

田中向性検査を実施した結果、S・Dが男子計一七・五五、女子計一七・九六あり、信頼ある分配を示したので、向性偏差値品等の中、外向、内向のものを選択して、それらが作業にどうあらわれたかをしらべた。

その結果は、内向、外向者共に各判定型に分布していること、又各段階に属するものでも、内・外向による区分をなしえないことにより、作業と向性とは一義的の相関は見られないと云える。

要するに作業は、向性以外の他の精神諸要素が、もつと根本的な働きをしているものと見られる。

思春期発育に関する一調査

Longitudinal measurementによる

(第二報告)

後藤 与一

反復的測定の資料を推計学的に整理し、思春期発育の特性を見出そうとするのが、当研究のねらいである。取

挙げた資料は女子七八名の六才時から一四才時まで九年間の身体検査の結果である。この研究で興味を牽いた問題は次の二点であった。

1、Ruella Cole が Psychology of Adolescence.

1949 に引用した F. K. Shuttleworth 並びに N. Bayley の「青年期の身長年間増加量(p. 21)」のグラフについて。

このグラフは女子について言えば身長の最大年間増加期が十才半、十四才半に来る二つの集団を挙げ、前者を早熟女児、後者を晩熟女児とし、その曲線は、期間のずれを持つだけでなく、増加の量の異なることをも示している。この累加増加量をとつて両集団を比較してみると、十五才まで早熟女児は晩熟女児を凌駕し、十六才以降は反対になっている。この事実についての検証。

2、武政博士の青年期の発育の型について。博士は最新発達心理学下巻一八頁に C. H. Stratz の兄弟姉妹五人についての身長反復測定の結果からして発育型を A・B・C 並びに C の変型として挙げている。この型の分類についての検討、並びに発育型と他の発達事象との関係の検出。

二

ここで取挙げた標本は昭和四一—一三年までの十年間の全国平均並びに昭和廿四年度の全国平均を母集団として検定した結果、適当と認めることが出来た。

尚、初潮年齢、乳房発育の調査は昭和二十六年十一月上旬、組担任女子教官によって、個人面接による質問、観察を以てしたものである。

三

結論として、次の六項目がまとめられた。

1、六才時の身長と最大増加期との相関は有意でないという点と、一四才時における各最大増加期の身長平均間に有意の差がないという二点からして、身長の大

(或いは小さな)女子は必ずしも早熟(或いは晩熟)とは

言えないということ。

2、最大増加期の影響はシニワルワースの結果と全く同様で、一四才時において早熟群と晩熟群との身長平均差の減少を示している。

尚シニワルワースとの違いは、最大増加期の増加量が、早熟群と、晩熟群との間に有意な差が現われなかったという点である。

3、思春期発育の型については A、B は武政博士に従い、C 型は A、B 夫々の変型とし、新に C 型を A、B の折衷型として分類した。この分類によれば、A、B、C 各型の分布は四・四・二の比率であった。

4、各型の最大増加期平均と身長平均との関係は前の如くであった。何れも差は有意。

5、初潮年齢は身長最大増加期に無関係である。即ち初潮の早い子供は身長発育が早いとは言えない。

6、乳房の発育は身長発育と関係があるが、初潮年齢とは無関係である。

		B B' 型	C C' 型	A A' 型	F-test (a)
増大期平均		12.0 年	12.5 年	13.1 年	.01
身長平均	6才時	110.3 cm	112.7 cm	108.6 cm	.05
	14才時	149.6 //	152.3 //	148.2 //	.01

これによると B B' 型が早熟、A A' 型が晩熟。身長平均は C C' 型が最大、A A' 型が最小となっている。

職業興味調査についての一考察

畔上久雄

一、問題

現下行われている、職業興味調査の代表として、日本職業指導協会案の「職業興味調査」と、東京都職業適性相談所の「職業興味検査」を選び、これを同一被験者である、中学三年男五六名、女四四名に施して得た結果を比較考察する。

二、結論

1、A、B、C段階基準のとり方で、興味職業の数に大きな差異を生ずる。A、B両段階に属するものを興味ある職業とすれば、東京都案によって現われる数は、協会案によって現われる数の約三倍による。發達的に見ると、かどうかによってこの結果の解釈が異ってくる。

2、両テストの相関では、男〇・五六、女〇・七六で、可なり高い。項目別に見ると、男では、機械、技術、科学方面に高く、女では商業、芸術、自由業方面に高く、何れも〇・七を上廻る。

3、両テストの結果、一致した職業群数は、男女とも総計に於て五〇%をこえている。男では機械、技術、工員関係が非常に多く、女では、芸能、自由、文学と商業関係が多い。前項調査の結果とは一致している。

4、感情を主とするこの種興味テストの構造から来る性格は大きく被験者にひびく。成人の考えのまゝ入れたり、さごちない文句を並べると拒否される。場面の相異、他要素の参加、条件の加減附帯事項の有無によって%は可なり変動する。

例、口答発表の好悪を問うにしても、学校、学級の場面にすると拒否される率が一、五倍に上る。道具や機械を操縦することの好悪を尋ねるにしても、田島や家屋作業場面にしたのでは、その拒否率は倍加する。学校劇や

前項作業に於ては、数学、理科の法則、公式を適用することを好む割合は、かえって、増して来るのである。見学後の感想発表にしても、仲のよい友達間では好むが、学級や学校発表はいやだという。僅かな附帯語句のために、拒否される例として、字引を引く場合、「流行語」をつけただけでいやになったり、漫画の好悪問題として「こっけい」という語句を入れただけで好む率は減するのである。単に具体的場面にし、生活に直結させるために問題を作製すると以上のような結果になる。目的さえはっきりしておれば、むしろ色々な条件や場面を設けない方がよいようである。

「青年—両親関係」に

おける心理的距離

西平直喜

青年期の対人関係は、次の諸特質を持つといえる。

(1) 強い自我感情にもとづく、同一化傾向 (Identification) 及び対照化傾向 (Contrastification)。

(2) 愛の關係(愛—憎み・無関心)と力の關係(尊敬—反抗・嫉妬—崇拜・輕蔑等)の分化。

さきに(日本心理学会)(1)を述べたので、こゝでは、(2)について理論的及び実験的考察を発表する。

「青年—両親」態度の測定において、各問題は、25の良い評価、5の悪い評価よりなり、一定の採点表に、A 反(4点)、B (3点)・E (0点)として量化している。

今仮説として、「愛の点(L点)の高いことは心理的距離の近接を、力の点(S点)の高いことは心理的距離の疎遠を意味する」とする。しかし両者は、一次的に对立するものでなく、二次元的關係にある。従って、一定の操作によって得た、各L点及びS点を、Lを横軸にとり、Sを縦軸に距離を逆にしてプロットする。これを、父(F)及び母(M)について行う。

A : 父に対し愛し且つ尊敬している。

B : 父を尊敬しているが愛していない。

C : 愛しているが尊敬していない

これによって、(a)青年個人の両親に対する心理的距離と、その心理的構造を把握し得る。(各L及びSの項目は item analysis によって、(b)一定の Validity が保証されている。r. 0.4以上)次に、理想的なあり方を算定するため、F点の高いグループ(Fgグループ)及び低いグループ(Fpグループ)について、L傾向(L2/S点)の平均点を求め、そのX²検定によって有意の場合に、Fgグループの点を理想的な關係とみなす。同様 Ng—Mp においても行って算定する。(c)青年は男女共に父—母に対する好感はほぼ等しい。しかしその特質は、父にはS關係、母にはL關係が強い。(d)この図式的心理的距離は同時に青年の心理的態度を決定する。憧憬・敬愛・同情・反抗(敬遠)・輕蔑・無関心・等(e)この二次元的とらえ方は、特定親—子關係の動的把握を可能にする。(f)ミル父子の場合のごとき(ミル自伝)親—子關係も明白に分析が可能となる。

態度測定によって、操作的に、「青年—両親關係」を扱い、質問紙法を単なる現象的事実の調査に終始せず、更に原型的な意義を求める方向に進めようとした一つのところみである。

異性意識の発達に関する研究

(第二報告)

鈴木 木 清
間 宮 武

一、調査時、調査対象、方法

昭和二六年一月より昭和二七年三月にかけて任意抽出法により選んだ大学生、高校三年生の学生生徒および勤労青年二〇五名(男一一三名、女九二名)につき質問紙法および面接法により調査した。

二、結果

この時期までに恋愛感情を何らかの形態で体験したものは男一九二名(八一・四%)、女一四六名(五〇%)であり、恋愛体験の有無は男女の間に有意差をもっている。就中、男女の間の相異は、過去において相互的異性愛を体験したか否かに顕著にみられ、現在の相互的恋愛や過去および現在の一方的思慕感情においてはそれ程の相異はみられない。

相互的恋愛を体験したことのないものについてみると、特定の異性に対し一方的思慕感情を体験したものと然らざるものとの間では相互的恋愛を体験しない理由の相異が1%の危険率を以って有意の差を示している。すなわち、前者は相互的結合の機会がなかったという理由が多いのに対して、後者は異性と相互的結合要求を強く体験しなかったところにある。しかし一方的思慕感情を体験したものの群では相互的恋愛を体験しなかった理由について男女に差のないのに対し、全然一方的思慕感情すら体験しなかったものの群では男女に有意の差をもっている。それゆえ恋愛体験について、体験の形式の差というよりも、男女の性別による差が問題である。

恋愛体験に対する映画・小説の影響についても同様に男女の差が認められた。すなわち男子では恋愛体験の有

無又は形式と映画・小説の影響との間に有意差はみられなかったが、女子では、明らかに5%の危険率で相異が認められた。つまり女子では何らかの形で恋愛感情を体験したものでは、然らざるものよりも映画・小説の影響を受け、それによって恋愛感情が誘発されることが認められた。

将来の結婚に対しても、その感じ方が男女により相異している。すなわち、男子では、何らかの恋愛体験をしたものは将来の結婚に対し不安をもっているものが多く、これに反し体験しないものでは結婚不安をいなくもの方がむしろ少い。それに対し女子では男子と全く反対の傾向となっている。

青年の自己評価についての研究

佐藤 正

青年が自己の性格を評価するときはかれらの主観性に基くものか、自分以外のものに影響を受けるものか、また、青年期は主観性から客観性への交替期とされているが、性格的な自己評価の面でこの点が見られないかという意図で、次の調査を行った。

(第一調査)

被験者 東京学芸大学三年生男女計四〇名

期 日 昭和二七年三月

自己の性格評価を次の課題について作文させる。

- (1) 友人は自分をどうみているか。
- (2) 家族のものは自分をどう見ているか。
- (3) 自分は自分をどう考えるか。

この結果は第一表となる。

右の肯定とは友人又は家族の自己に対する評価に自分の見方が一致する場合、否定とは一致しない場合又は明らかに否定しているものである。

男女に、友人に対する否定が多く見られ、家族に対し

第一表(実数)

		男	女
友人の評価を	肯定	8	4
	否定	18	6
	一部肯定	2	
	一部否定	2	
家族の評価を	肯定	12	8
	否定	8	
	一部肯定	6	
	一部否定	4	2
(被験者)		30	10

て肯定が多く見られる。女子より男子に否定的傾向(とくに家族において)が強く見られる。この全体的傾向を検証する意味で、次の第二調査を行う。

被験者 東京学芸大学三年生男子一六四名、女子二四名
期 日 昭和二七年七月

第二表

		男	女
自分自身	42.2	18.5	
家族	47.1	51.4	
友人	8.1	28.5	
先生	2.4	1.4	
計	99.8	99.8	

質問紙法
あなたを一番よく理解(性格的・人格的)してくれる人は誰ですか。

この応答を整理し、百分比に直したものが第二表である。家族の

成員について更に細かく見ると、第三表となる。ここから男子においては

第三表

	男	女
父母	8.1	5.8
兄弟	25.3	40.0
姉妹	8.1	
弟妹	3.2	4.2
叔母	0.8	1.4
叔母	0.8	
計	47.1	51.4

自己評価に主観性が強くあらわれ、女子においては母に依拠することの多い点が知られる。男子においては主観性が強く、女子においては比較的客観性が多いと云えまいか。

社会的場面に於ける

先輩の機能（序報）

斎藤 幸一郎

一、目的

児童が形成する社会的構造に於いて、その構成メンバーの中に、特定の遊びに関して経験を持った児童、即ち先輩が含まれている場合には、然らざる場合に比較して、果して遊びの過程の上にどのような相違が見られるか、そして又、特に、先輩は、他の児童に対して、どのようなして広義の「教育作用」をもたらすかを、実験的に研究しようとの意図の下にこの研究を行った。今回の発表は、その序報である。

二、実験装置及び手続き

被験者たる児童の遊びとしては、多くの児童に最も興味深い模型電気機関車の遊びを取り上げた。そのため、実験室に十六軌幅の模型レールを8の字型に約十米敷設し、一周を四つの区間に区切って、区間毎に駅と信号機を設け、実験のコントロールのため、その四つの区間は、それぞれ四箇のスイッチに配線した。更に、記録を半ば自動的に行うため、それら四箇のスイッチは、両切スイッチとし、回路の片方は、同時に記録装置の四本の記録針に導かれるようにした。又、記録装置には、時間記録用の記録針を設け、これによって児童のスイッチ操作の過程を自動的に、且つ時間的に正確に読み取り得るようになると同時に、実験者は、実験中の児童の発言をすべて記録用紙の上に記入出来るようにした。（この記録装置は今回の実験のために、実験者が創案したものである。）

ある。）

被験者は赤羽小学校第三学年児童を用いた。一回に四人を実験室に入れ、各スイッチに一人宛配置し、最少限の注意事項を与えた後自由に遊ぶように指示し四十五分間観察する。第二回の被験者には、第一回にて使用した者の中一名と、新しい三人とを組合わせて四人としたものを一グループとし第一回と同様の手続で行う。このようにして、全員未経験のグループと、一人だけ経験者の含まれたグループとを交互に観察する。

三、経過

現在まで六グループの実験をまとめ得たに過ぎないで、結論的な事を述べるわけにはいかないが、ともかく一応まとめて見ると、

- 1、先輩の居るグループの発言総数は、先輩のいないグループに較べて著るしく少いようである。
 - 2、先輩のいるグループでは、必ずしも、先輩、即ち一回の経験者の発言が他の児童の発言よりも多いとは限らない。
 - 3、発言内容の種類をわけて考察して見ても、類型別による一般的傾向は見られず、又、先輩の発言がどのような種類の発言が多いとも言えない。
- よって今後は、先輩の訓練を強化し、少くとも十回位の経験を積んだ児童と新しい児童とを組合わせた場合について、観察を行う予定であり、現在研究続行中である。更に又、メンバーの選択にコントロールを加えて更に厳密な実験条件の下で研究を行う予定である。

チャタレー裁判是非に

ついでにの大学生の態度

赤塚 泰三
高橋 義和

一、「チャタレー裁判」は、意外に世評をよび起した問題

である。学生（青年）はこれに対してどんな意見を持っているであろうか。

「今チャタレー裁判について、いろいろ意見が提出されているが、これに対して諸君はどう思うか、その是非を明らかにして意見を述べて下さい」という問題を提出して集まった回答一〇七についてまとめた。

時は、七月中旬、丁度公判が半頃、すなわち世評が最高潮の時に行った。

二、結果、

裁判 — 是 — 四五（小説悪い13を含む）
 — 非 — 五四（小説良い11、出版可11）
 — 不明 — 七

三、代表意見

- (1) 裁判是非
(イ) 検察権でおかしいと思うものをとり上げるのはあたり前だ。
(ロ) 日本の現文化水準から見ても難点のある本を取締るべきだ。
(ハ) 青少年の有害書だから
(ニ) 芸術性を云々するのは一部識者層のみだから、
裁判非
 - (イ) 検察権の濫用で、憲法違反だから
(ロ) 日本文化の恥である。
(ハ) 「ワイセツ」と「芸術」は主観の問題である。
 - (3) 裁判には反対、必要を認めない、他の方法がある。
(イ) 適当な人物により解決すべきだ。
(ロ) これ以上出版させない。
- 出版は限定し、国会図書館で保管すべし。
(4) 弁護人側の主張は、文学的見地からのみであるが今少し一般読者層の立場を考慮すべきだ。
(5) 性教育の指導書とすべきだ。
(6) 「ワイセツ」ではない。

部分にすぎない。文学は読んだ後の感で価値を決めるべきだ。

(7) これより一般エロ雑誌を取縮れ

日本書記、古事記、フアウスト、近松も部分的にはワイセツが見られる。しかし読んで逆説的に性を説明しているものだ。

(8) 其他

衆議院の法務委員が決めるべき問題だ。

映画観客調査(その八)

「あゝ青春」を大学生はどうみたか

乾 孝
鈴木 幹 人

法政大学心理学研究室は戦後特に学生の動態を把握するための諸調査を行うと共に、映画観客の諸対象についての調査を続けて来たが、ここに発表するものもそれらの一つであり、特に哲学科学生上山、泉両君によって行われたものである。

過去七回の「映画観客調査」によって、映画は観客の生活体験によって、鑑賞、理解されることが確かめられており、また映画の登場人物の接触面が限定されているので、それへの観客の声は彼ら自身の態度評価を表明するものであるといえる。すなわち観客の声は映画を媒体する彼ら自身の動態の投影とみることが出来る。そこで、今回は大学で現地撮影が行われ、試写会を中心にいわれる学内のレッド・ページ問題にからんで文学部自治会と映画研究会とが異った評価を下し、学生間に注目をひいた映画「あゝ青春」を取り上げ、「学生の動態」を把握する一つの試みとして行った。(五一年七月中旬)

声の内容により見方の異った三つのグループ(文学部と映画の論争を中心に)を得、それぞれグループは映画の登場人物への理解並びに評価に特色を見せていること

が見られる。この方法による調査を数量的に行うことによって「学生の動態」をとらえる一つの有効な手掛かりが得られるのではないか。

教職員生活時間構造の分析研究

金井 達 蔵

目的 教師の要求に基づき活動の時間的反映である生活時間の構造を質ならびに量の面から分析し、教職の特性を明かにしようとする。職場(在校時)の教師負担量の算出に止まらず、また消費生活にも偏せず全生活時間も等しく分析した。特に教育科学の立場と労働科学の立場との結合を企図した。

方法 神奈川県下公私各種学校教師を母集団として四二〇名を層化抽出、時程表により記録を求めた。

結果 研究を質的考察と量的考察とに分ける。

I、質的考察 生活時間構造を時間部分(要求に基づく活動の種類)、時間布置(活動の空間的定位)、時間配列(活動の時間的定位置)の三面から分析をこころみた。時間部分は要求、拘束性、労働力・エネルギーの支出補給、収入消費の対象などにより職務、非職務、準職務時間に大別される。これらは更にその目的、任意性、代行性の程度によって、職務時間は指導、校務、準備の各時間、非職務時間は生理的再生産、家事労働、文化・社会の各時間に、準職務時間は通勤、副次的労働の各時間にそれぞれ分かれる。すなわち非任意性非代行性の時間部分は指導、生産的再生産、通勤の各時間、準任意性、準代行性は校務、家事労働、副次的労働の各時間、任意性非代行性は準備、文化社会の各時間、任意性代行性は社会教育時間となる。これら九の時間部分はさらに直接、間接に分たれ、これらはまたさらに集計単位の最下位活動に分たれる。

時間布置は規定、非規定、準規定の時間に三分される。

規定は登校より下校に至るまで、非規定は〇時より自宅出発まで(前半)と自宅到着より二十四時まで(後半)とに、準規定は自宅出発より学校到着まで(前半)と学校出発より自宅到着まで(後半)ものそれぞれの活動時間である。

時間配列としては、時間布置の時間量より起床、家出発、登校、下校、自宅到着、睡眠の各々の時刻が求められる。

II 量的考察 整理は性別、学校別、地域別ならびに校長・副校長と一般教諭、勤務年数と学歴とによる差異、教員と一般俸給生活者ならびに工場労働者との比較を試みた。今回は性別ならびに校長副校長と一般教諭との差異の報告にとどめる。

結論 教師の生活時間の特長は職務時間の過大、家庭における準備時間の負担に明瞭にみられる。また文化・社会時間の少い点、女子の家事労働時間の過重負担は頗る大きな問題である。非任意性、非代行性の時間部分はおくとして、準任意性、代行性の時間部分(校務)家事労働、副次的労働の各時間を如何に合理化・社会化して、任意性・非代行性の時間部分(準備、文化社会の各時間)をもつかということが教師として、人間としての豊かさを増す方策であろう。

教員の類型に就いて

塩川 武雄

一、目的 教員タイプが問題とされる時、もとより理想的教師としては如何なるタイプの人望ましいか。即ち理想的教師像というものは一応人々によって形成された様に考えられる。併し乍ら、現実的には教師を類型化した時に如何なる教師の形態があるかを明かにし教師の教育やその指導を如何にすべきかを研究せんとするものである。

二、被験者

小学校教員 七十五名(女一六〇、男一五)

評価対象となった教員 一一五七名

(男一四〇五、女一七五二)

学校数 五〇校(主として小学校)

三、研究方法

(1) 各学校について教員全体が一々挙げられた教師を類型に従って評価する。此の場合結果の一致度の高いものをもって其の人の型と決定する。其の基準は七〇%以上の一致があれば良い。かくして評価された各人を統計的に処理する。

(2) 各学校の代表者一、二名によって其の学校の教師全体を評価せしめる。それを統計的に処理する。勿論、評価者の主観によって大きく左右されるが蓋然的傾向は知りうる。(本研究の調査法)

四、調査研究の結果

	類型	実数	%
1.	頑固—徹型	57	5
2.	聖人君子型	30	3
3.	向上進歩型	180	15
4.	打算型	90	8
5.	不平不満型	115	10
6.	無頓着型	71	6
7.	温良貞淑型	160	14
8.	因循固息型	44	4
9.	社交宣伝型	100	9
10.	追随低頭型	67	6
11.	超越遠視型	63	5
12.	一言居士型	53	4
13.	ボス型	20	2
14.	腰掛型	62	5
15.	陰険暗躍型	45	4
	計	1157	100

五、結果の考察

1、女教員の十四%は最も多いのであるけれども、女教員全体の五分の一で満足ではない。

2、向上進歩を目指している教師が結果では一位であるが全体として低調である。

3、ボス型の者は小学校の場合には少く二校に一人位の割合である。

4、一時的、腰掛的教師が大体各校一名位いるが問題である。

5、不平不満を持つ教員が各校平均二、五人であるが考えるべきことであろう。

6、一言居士がどの社会にも一人位はいるものである。

7、社交宣伝的な教師が各校平均二名位あることは問題とすべきである。

六、備考

1、予備テストにおいて教員の類型を決定する。このために如何なる教師の型があるかを研究者が数例を挙げて其の見本を示し、被験者に対して自分の学校の教師を念頭に置きつつ型を作らせる。此の結果を統計して十五の類型を作り出したものである。

2、被験者が小学校教員就中、助教、仮免所有者に限られてしまったので本研究は十分ではない。最初の企画は幼、小、中、高、大学に至るまで男女別にこれを調査する予定であった。此の点は現在調査しつつあるので他日発表したいと思う。

島における生活と心性

——三宅島における

教育的環境について——

恩 田 彰

伊豆七島の一つの三宅島の自然的環境、それが及ぼす社会的・経済的状況が、いかに島民の生活なり、心性を形成してきたか。従ってこれらが、どのように教育的環境として児童に蔽いかぶさっているか。これらの問題について論じようとするものである。三宅島は一火山島として内地より一六〇軒も離れ、資源に乏しく、半農・半漁を事とし、産業興隆の望み少く、唯乳酪業を唯一とする産業により、何とか口をうるはしているにすぎない。

島民は労働意欲は盛んであるが、生活改善という事を考えない。根強く習慣にしばられ、島の隔絶性と狭小性は一般に農山漁村に見られる封建性を強め、閉鎖性を形成する。それが保守的な思想や生活様式を規定し、全く進歩という所にはほど遠い。唯勤勞をよくするだけで、文化にはあまり関心はなく、従ってその施設もない。教育に及ぼす影響また大である。子供も労働力の一端をになり、勉強より働く事が大切で、疲れた姿を学校に現すを少しとしないという。家庭生活においては家長の権力は絶対的で、結婚は彼の掌中に握られている。しかしうまくゆかない時離婚は自由だし、再婚は何とも思っていない変った所が見られる。こういう所から、教育上色々な問題を投げかける。カリキュラムを編成するのに適当な教材が、その地域社会から見出せない。職業指導においても、農業、水産業を中心として、その外のものはいずれも問題にならない。内地に出てゆくことに対し、非常に臆病である。P・T・Aはあるが、仕事の都合で会合が遅くなり、十分議事はこぼさない。勿論父兄は子供の事は学校まかせである。しかし、経済的な援助を措きまなす。金では困るので、労働を以て金にかえるのである。社会教育は非常に必要とされる。文化といえば、赤本雑誌文化で、本屋が島で一軒あり、やっと文化のイキを吸っているにすぎない。次に児童の素質については、都会に比べてずっと低い。これには色々の条件があるだろうが、以上の事からえられる文化的環境と、これに加えるに長年の近親結婚及び飲酒の盛んなことがあげることができよう。その外島の子供の特異性および問題性についてあげるならば、成人の心性と同じく權威に対し屈従し、受身的で環境に適応する事を知らない。やることは秩序なく組織的ではない。しかし簡単な事は、できるという程度である。自主性に欠ける子供、これを児童中心の教育に持つてゆこうとする教師の苦勞大いに察することが出来る。又体質的にいって、牛乳や肉類に不適応性

を示すことは、栄養上の問題を持つ。この島に赴任して来た教師は、最初は夢や希望を持っていた筈だ。然るに何年かたつうちに、その情熱はうすれ、唯諦めの中にさとりを感ずるといふ風に、島そのものからの圧力に押しまくられる形である。教育は児童の教育だけにとどまるものではない。社会教育及び社会そのものの改善なくしては、本当の教育は望むことはできない。

皮膚電気反射の大きさ

測定方法について

大 坪 孝 彦

電流を通ずる場合の皮膚電気反射、所謂精神電流現象の大きさを測る方法としては従来から多くの試みが行われているが、最近 Haggard 等の論文を見ても振巾の適当な測定方法について未だ結論が得られていない様に思われる。

私は此の問題を取り上げ、反射の時間的経過と大きさを正確に論ずる事が出来る単純回路と F 型振動子を用いて、酷暑期を除き六月上旬から九月上旬迄の間に二十才前後の女子を対照として、右手掌—右前膊誘導回路に 50 または 100 μ A の一定の電流を流して置き、一方左手掌—左腕誘導回路には 50, 100, 150, 200, 250, 300, μ A の段階で主として感電刺激を一〇秒間隔で凡そ一五回宛与え、左右同時記録した。此の場合電流値を可及的に一定に保つために随時電圧を調整する方法と、電圧を一定として多少の電流値の変化は振動子の向きを変えて調整する方法との二つを行った。被検者の内外条件の均等化に極力留意しつつ、毎実験前後の皮膚温度の測定を行った。成績については、研究が緒にいたばかりで、なお成績の整理も未完成であるが、今日迄の経過を報告する。潜伏時については右対照側について各人平均二七回、反応について、同じく対照側について各人平均六〇回の

夫々の平均値と信頼限界(五%の有意水準)を求めた。なお反応時の対照側全体の分布は正規型として近似可能である。反応時—振巾の相関について一定の電流値の場合の相関を求めると直線的な関係は得られなかった。次の左右手掌に於いて、電流値の相違する場合について相対応する反射を比較しても電流値の相違に基く潜伏時及び反応時のずれは明瞭でないことから電流の影響は温度の影響に比較して無視出来るものと思われる。

次にその人の興奮は左右電流値が相違しても、同じであると考えられるから、どの様な数値を求めたならば、左右手掌の反射の大きさを等しくする事が出来るかが本研究の目的であるが、整理が未完成で未だ結論が得られていない。但し猫(三四)を使った動物実験に於いては、視床下部に一定の電気刺激を与えた場合の肢蹠反射曲線の振巾の平均値は、通じてある電流の増加につれて比例的に増加するのが認められた。

皮膚電気反射の発現

機序に関する研究

藤 森 聞 一
白 岩 達 夫

皮膚電気反射の発現機序に関する従来の研究によれば、その中枢は前運動領乃至運動領及び現床下部にあり、それより交感神経を通り皮膚汗腺に達するものと云われているが、私共は電流を通じ Vibrator-F によって記録する私共の方法を用いてこの反射機序に検討を加え、先人の業績を追試した。

実験方法としては通常2個の単純回路を用い、電極は亜鉛飽和硫酸亜鉛、カオリンの不分極性電極を使用した。実験成績 (1) 先ず大脳の中核の問題については猫三〇数匹を用い運動領、視床下部(灰白結節部)に感電刺激を加えた結果、次の様な成績を得た。

(1) 運動領及び視床下部刺激により四肢蹠から反射が証明された。その場合前肢の反射が大きく、運動領の場合は同側前肢の反射が大きい様である。

(2) 反射の現れ方については、先に猫の腰部交感神経節刺激の場合に認められた法則性が、この場合にも立証された。即ち、刺激の強さを次第に強めて行く、とある一程度迄は次第に反射の振幅が増大するが、それ以上強めても振幅は増さずに一定する。感電単一刺激の間隔を次第に短縮すると、反射曲線が漸次重畳し遂に美しい一つの Summation の曲線が得られる。予め通じておく電流値を強めるとそれに伴って反射の振幅も増大する。

(3) 腰部交感神経節については、刺激実験成績はこゝでは省略し、切除実験成績について少しふれると、人間において腰部交感神経節 II・III・IV を切除すると、その側の下肢の、Richter による交感神経皮膚分布区域に一致して電気抵抗が増し、又 Minor 検査法による温熱性発汗が停止し、皮膚電気反射が現れなくなる。

(4) 末梢神経については、三人の被検者を対象として肘、節部に於いて尺骨神経に麻酔を施すと、其の側の手の尺骨神経分布区域に一致して知覚障害、皮膚電気抵抗の増加、Minor 検査法による温熱性発汗の停止、皮膚電気反射の消失が認められる。

なお数例の移植皮膚についても同様な所見が認められた。以上について私共も皮膚電気反射の発現機序に関する従来の学説を検討し、夫れが正しい事を実証し得たのでこれを基礎として今後の実験を進める予定である。

気温の皮膚電気反射に及ぼす影響

藤 森 聞 一

一九才より三二才に至る女子一〇名を対象とし春、

夏、冬の三季節に於ける皮膚電気反射の現れ方の相異と追求した。

実験は Vibrator-F を使用する所謂単純回路二個を併用し、精神性発汗部位である手掌と、温熱性発汗部位である手背の両部位について行い、其の場合反射直線の時間的経過の追求を主眼とした。

(1) 手掌側反射については春(室温二四度C前後)、夏(同二八度C前後)に比較して、冬(同二三度C前後)には反射の潜伏時、反応時(反射の起始から頂点に達する迄の時間)が著しく延長し、全員の平均値を見ても春の潜伏時、反応時が夫々一・七二秒、二・一五秒、夏が一・七九秒、一・七八秒に対し、冬は二・七五秒、四・五一秒に達し、春、夏と冬の成績の間に有意の差が認められた。

(2) 三人の被検者について指端掌側末節の加温により潜伏時、反応時を対照側に比較して短縮せしめ、冷水冷却により延長せしめ、更に氷水冷却により遂に対照側から著明な反射が現れているにも拘らずこれを全く抑制する事が出来た。

(3) 猫三匹について腰部交感神経節の直接感電刺戟による後肢趾の反射についても同様に其の肢の加温により潜伏時、反応時は著しく短縮した。

以上の成績から手掌側反射の現れ方の季節的相異は皮膚温の測定結果から見ても主として其の時の皮膚温の相異に帰せられたが、単に之のみによつては説明し尽されず、汗腺機能の季節的順化の如きものも認めなければならぬ。

(4) 手背の反射について夏は一〇例中六例に、春は同じく三例に反射が現れ、冬は誰からも現れなかった。

(5) 此の手背から反射が現れない場合に、手背の電極装着部位の狭い皮膚面だけを四〇度C以上三〇分間加熱した所、温暖な季節には、六例中二例から反射が現れたが比較的寒い季節には四例中誰からも反射が現れる様にな

らなかった。併し手背からも反射が現れ始めると手背に於けると同様に加温により潜伏時、反応時は短縮する。以上の成績から手掌と手背の反射の現れ方は季節的にも相異し、其の場合特に手背に於いて季節的順化の著しい事が認められる。

意識と行動

水野 常吉

現代の道德教育の問題を学校教育分野に限定して検討して見れば、結局「児童生徒を如何なる手段によつて善人に成長するよう援助すべきか」という方法論、即ち技術の問題である。これを分析して見ると三つある。一は修身、公民、道德、倫理、憲章という如き名目で直接的に道德に関する事実を地理の地形を教うるのと同じ方法で授けべきものとの意見。二はこれと全然反対に間接的に訓練すべきものとの意見。三は折衷主義で理論と實際が必要であるとの仮定に立つものとの意見。

一は御同様当然の事として受けて来た教育法で、人間の行動の系統的知識を与え、それによつて自己を内省し、批判し、善い方向に行動せしめようとするものであった。ここに一般人の気付かない意識と行動という心理学的の危険が伏在している。もしわれわれが子供の眞の道徳を助長させようとするなら少くとも中学校、高等学校最上級時代迄は、みだりに内省せしむべきでない。道德的判断、道德的意識の美名のもとに自分の行動に注意するよう習慣づけられると、往々にして健全なる全人或いは善人となる妨碍を与えるのである。

人間が意識を有することは畜生と区別される大切なものではあるが、その道德の意識、善の意識など、意識そのものを讚美するようになればなる程重大な危険が伴うことを認めねばならない。人生活動の広き地域には意識の支配以外のものが多分に存在する。又若ければ若い程

意識によって影響される行動は曖昧、逡巡、遅緩ならしめる傾向をもつものであり、この理由から自分の善行を計算する如き人を信用する事が出来ないものである。とにかく自己の行動の善悪を内省してから行動する習慣になつた人は、人生がいやになり、遂には自殺しかねないはめに陥る事がある。英国の笑話中に面白いものがある『蛙は百足に「君のどの足のあとにどの足が来るのか」と笑談を言ったら、この一言強く響いて「どんなにして駆けるのか」を考え、とほうにくれ、堀の中にのびて仕舞つた』というのである。多数の足を意識的に操縦したら行動無能力ともなるであろう。演説を上達せしめようと文法や修辭学、抑揚法を教えたなら自分の思ふ事を話せなくなつて仕舞つたとか、熱心に英法を修めたものは会話がまづいという实例、又旧制師範学校の教育で教師としての自覚、反省会、行動の内省等の習慣づけをした結果が一要因となつて小心翼翼の型が出来上つたといふ如き事は意識と行動関係研究に大きな示唆を与えるものと言わねばなるまい。故に道德教育の技術は一の技術を廃し二の間接的技術を採用し、寧ろ無意識に学校全体の活動を通じ公正な行動するよう刺戟するのが善いので、条件反射的な容易に善を行動する神聖な習慣に誘導することが大切である。しかしかかる行動は道德価値ありと言われないではないか。否然らず知的判断以上の眞の価値ある行動である。聰明なりしアリストートルはそう考へた。ソクラテスの徳は知なりという未熟な説に反対して徳は実行なり習慣なりと喝破した。

体育の場の構造と性格

——実験的研究その一、
忍耐力について——

金 原 勇

一、研究目的

よく体育・スポーツを通じてよい性格が育成されると

いわれる。しかし無反省にスポーツを行ってもよい精神的効果が得られるであろうか。スポーツの場でフェアな態度を示す選手が生活の他の場で不正を働いて恥じないもののあるのを見てスポーツの場で示されるフェアプレイの精神はその場限りのものであって生活全般に波及しない、つまり性格にならないという人もある。このように見てくると体育・スポーツを通じてよい性格を育成するには指導技術上解決しなければならぬ根本問題のあることが理解される。このような対立する二つの意見の生じたのは体育・スポーツそのものの罪ではなく指導方法の未熟さに基くものと思われる。

私は今日までに、忍耐力について二回、フェアプレイ・明朗性についてそれぞれ一回実験を行った。いずれも予備実験の程度で今回の報告は忍耐力の第一回目のものである。

二、研究方法

レヴィンは $B = f(P \cdot E)$ という公式を示した。人の行動は主体環境体制によって規定される。だから主体・環境体制を心理的場の構造という言葉で表現すると場の構造の如何によってよい行動が行われたり悪い行動が行われたりする訳である。よい性格はよい行動体験を積み重ねることによって育成されるとよい性格の育成にはよい場を与えればよいことになる。この研究はどのような構造を持った体育の場で忍耐力が育成されるかを実験的に究明しようとしたものである。

(1)、仮説 忍耐力の育成される体育の場は、次の三つの条件を備えていることが必要であろうと考えられる。
(イ)、困難な事態に長く耐えなければ目的に到達できない。
(ロ)、積極的に困難に立向う態度がある。
(ハ)、人格目標(忍耐づよい人にスポーツを通じてなりたいという)が立っている。この実験は上の仮説の検証を試みたものである。

(2)、実験方法 実験群には上の三つの条件がそろった

場を与える。統制群には第一・第二の条件を整える。第一の条件を整えるために二千米競走を、実験群には第二・第三の条件を整えるために人格目標を与えるような指示を、統制群には第二の条件として単なる激励を与えた。又偶然に生じた全級員の二千米罰走を利用した。罰走群には第二・第三の条件が欠けていると見てよい。競走後教室に入って調査用紙に記入させた。調査用紙について、競走前の気持、競走中の気持、競走後の気持、気持の変化、それらの原因などについて三群を比較検討する。被験者は中学三年の男子二組、二年の一組全員である。

(3)、結果 忍耐力の育成される体育の場の構造として第三の条件が如何に大切であるかが明らかにされた。

カタログメソッドの研究

格言テスト(その三)

高橋 和年

格言テストは、今夏第十一回大会で報告したカタログテストと同様、Zürich の F. Baumgarten によって「職業指導と選択のための性格の心理学的検査」として創始されたものである。このテストの刺激は数百の格言から成っており、それらは、Ar(勤労に対する態度)、Bi(教養・知識・真理に対する態度)、Fi(交友に対する態度)、Ge(金銭に対する志向)、Iw(生活の知恵、人間知と云ったもの、又人生の aradoxical な真実)、Mo(道徳的見解)、Re(宗教的感情)、So(対人交渉・社会的感情)、Sv(自己完成への傾向)、Vw(種々なる行為様式)の十の領域に分類される。被験者はこれらの格言集の中から「気に入ったもの」十を選び、且つその選択の理由につき述べなければならぬ。被験者がいかなる格言を選んだかによって我々は、後の Mentalität を捉えることができる。Mentalität は、単なる性格特性と同一視すべきでは

なく、moralische Tendenz, Denkweise, Urteilskraft 等を含んだより広い概念として理解されなければならない。そしてかかる Mentalität が、人間の社会的並びに経済的生活の諸種の現象に対する Stellungnahme を規定するのである。格言テストは所謂「Indirekt Befragung」として、被験者に、自己に対する評価の危機を感ぜしめることなく、後の Mentalität を、選ばれた格言を通じて、明かにさせる。
(一九五一年一月二三日)

ソシオメトリの信頼性について

塩田 芳久

問題 ソシオメトリの信頼性の問題は、それによって得られるものは質問に対する児童の応答であるという点から、主として発するよう思われる。そこで、ここでは次の三つの問題を取りあげて検討する。

(1) 質問者の相違による児童の応答傾向の変動の問題

(2) 短時間をおいて行う連続的調査における応答の一致の問題

(3) 応答と実際行動の一致の問題

方法 被験者は小学校一年から六年までの各一学級の生徒計三一五名。まず、一般の手続によって好きな友人を順番に三名まで選択せしめる。調査は前後三回にわたって同じ仕方で行う。一回目と三回目は各学級の担任教師、二回目は他学級の教師で、各回の間隔は約一〇分。以上は(1)と(2)の問題に関するものであるが、(3)については次のような短時間見本法による行動観察を行う。

見本児童として各学年より一〇名ずつ選抜、一日三回(登校時と第一時限及び昼の放課)、一回の児童一人当たり観察時間三〇秒—一分間、連続一〇日間、観察者は担任

教師とその協力者。

結果と考察 第一表は一回目の調査において第一順位に選択した友人を二回目(三回目)においても選択(順位は問わない)しているもの数(%)を学年別に示したものである。これで見ると、質問者が同じ場合も、異なった場合もその一致度間には大差のないことがわかる。

$$\chi^2_0 \left(\chi^2_{(0.05)} = 11.070 \quad \chi^2_0 = 0.0043 \right)$$

$$df = 5$$

第二表は別に六年の他の一組を使って、異なった質問者として筆者自身が当たった場合の結果である。また第三表は、その際の連続的調査に伴いがちな児童の誤解の程度を調べたものである。

これらの結果を総合して、質問者が異っても児童の応答傾向には著しい変動をみとめないといえよう。

そこで、第一表の値(%)をそのまま、この測定信頼度を示す指標とするならば、三年から可なり高く、五年以上では著しく高くなるのがわかる。

次に、前後三回の調査を通じて選択の順序まで完全に一致したものの数を調べてみると、第四表の通りで、全体的にその値は極めて低いが、学年的傾向には変りはない。

観察の結果は第五表のごとくであって、こゝでも低学年と中・高学年との間には有意差を認めることができる。

以上の結果から、ソシオメトリーは小学校の三年生以上において使用さるべきであり、確実には五年以上であるといえよう。

新制田中 A 式団体知能検査

第二形式の信頼度について

長谷川 貢

検査の信頼度とは一定の検査に対する同一被験者の反応における偶然誤差の多少のことである。この場合、誤

第一表 応答の一致度(%)

学 年	1	2	3	4	5	6	全体
人 数	50	50	60	50	55	50	315
一回と二回	34.0	36.0	65.0	66.0	81.8	94.0	63.1
一回と三回	26.0	28.0	66.7	64.0	80.0	94.0	60.4

第二表 応答の一致度(%)

人 数	異った質問者	同一質問者
53	96.5	85.0

第三表 誤解調べ(%)

	同じ友人を選択すべきだと思った	異った友人を選択すべきだと思った
異った質問者	24.6	1.9
同一質問者	18.7	11.3

第四表 完全一致度(%)

学年	1	2	3	4	5	6
%	0	0	11.7	16.0	21.8	38.0

第五表 (%)

学 年	低学年 (1.2)	中学年 (3.4)	高学年 (5.6)
好きだと指名している友人と遊んでいる回数	33.9	48.4	52.0
他の友人と遊んでいる回数	50.7	39.0	37.3
独りぼつちでいる回数	15.4	12.6	10.7

差の少いほど信頼度は高いといわれる。

検査の信頼度の表わし方につきの四法がある。(1)再検査法、(2)代替検査法、(3)折半法、(4)小問分析法。

このうち(1)の再検査法においては第一回に行った検査の反応の記憶が残っている可能性があること、倦怠感を生じて反応をでたらめにする危険が少くないこと、時を異にして実施するゆえ、環境的条件(気温、照明、換気、雑音など)、検査者における検査技術(示教や計時の相違など)、被験者の心身条件(健康、疲労、動機づけ、注意の動揺など)に変化が起る可能性がある。

(2)の代替検査法においては、併用する二種の検査の実施が時を異にするゆえ、再検査法におけると同様な諸条件の変化が起る可能性がある。

昭和二十五年七月、東京都内某中学校一、二、三年生

一五〇名に対して、新制田中 A 式団体知能検査第二形式(日本文化科学社版)を施行した資料について、その信頼

度を第三法と第四法とによって算出した結果はつぎのとおりである。

(1) 下位検査の種類別にジグザク法によって折半したものに對する得点は平均と S・D とにおいて相互に極めて近似している。 $(\bar{X}_1 = 17.40, \bar{X}_2 = 17.16, S_1 = 6.93, X_{1.2} \sim X_{2.0}$ の差を検定して見ると $\alpha = 50\%$ となつて、有意と認めることはできない。)

(2) 折半した両系列間の相関係数は $r = +.78$ である。これをスピリアマン・ブラウンの公式によって換算すると $+ .89$ となる。

(3) ルーロンの公式によって算出した信頼度係数は $r = + .93$ である。

(4) クーダー・リチャードソン公式 R_0 によって算出した信頼度は $r = .96$ である。

(5) クーダー・リチャードソン公式 R_1 によって算出した信頼度は $r = .89$ である。

A式およびB式知能検査の

練習効果について

鈴木 正博
柴田 正博

知能検査は、作業によるものであるかぎり、ある程度の練習効果のあることは、一般に認められている事実であるが、それが検査の種類により、時間その他の条件によってどのような発達が見られるかを見ようとしたのが、この研究の目的である。

昭和二十六年六月六日から七月四日まで、毎週水曜日に田中A式(第一型式)、金曜日に田中B式(第一型式)をそれぞれ連続五回実施し、さらに約百日の間において第六回を実施した。被験者は東京都西原小学校五年生第二組約六〇名である。

その結果を要約すると、

- (1) 練習効果は、両検査のいずれにも見られる。
- (2) B式の方がA式よりも練習効果が少い。すなわち、偏差値の男女平均を見ると、A式では第一回から第五回まで、それぞれ52、61、67、73、77であるのに、B式では55、62、66、68、70であった。
- (3) 各回の曲線を比較すると、いずれの場合も第二回目の進歩度が最も著しく、その後Aは大体恒常的な上昇をするのに対し、Bは三回目あたりでほとんど上極に達し、その後の進歩は僅かである。
- (4) 男女の差を見ると、男子は各回とも、Bに秀れ、女子はAに秀れている。その差は、偏差値で二点内外で僅かではあるが、傾向は恒常的である。
- (5) 百日の間をわたる第六回の施行の結果は、A74、B71で、Bは第五回目の成績とほぼ等しいが、Aはかなりの下降を見せている。
- (6) 下位テストの分析の結果は、練習効果の大であった

第一表 調査問題及時間

算法	内 容	例 題	時間
写字	I 基数の写字	8, 5, 2.....	1分
	II 二位数の写字	15, 86, 27.....	1分
加法	I 基数+基数<10	$\begin{array}{r} 2 \\ +3 \end{array} \quad \begin{array}{r} 4 \\ +2 \end{array} \quad \dots$	1分
	II 基数+基数>10	$\begin{array}{r} 7 \\ +6 \end{array} \quad \begin{array}{r} 8 \\ +3 \end{array} \quad \dots$	1分
	III 二位数+二位数<100	$\begin{array}{r} 16 \\ +27 \end{array} \quad \begin{array}{r} 34 \\ +48 \end{array} \quad \dots$	2分
	IV 二位数+二位数>100	$\begin{array}{r} 58 \\ +76 \end{array} \quad \begin{array}{r} 54 \\ +87 \end{array} \quad \dots$	2分
減法	I 基数-基数<10	$\begin{array}{r} 7 \\ -2 \end{array} \quad \begin{array}{r} 8 \\ -3 \end{array} \quad \dots$	1分
	II 二位数-基数<10	$\begin{array}{r} 16 \\ -7 \end{array} \quad \begin{array}{r} 13 \\ -5 \end{array} \quad \dots$	1分
	III 二位数-二位数=二位数	$\begin{array}{r} 43 \\ -16 \end{array} \quad \begin{array}{r} 58 \\ -29 \end{array} \quad \dots$	2分
	IV 三位数-二位数=二位数	$\begin{array}{r} 126 \\ -47 \end{array} \quad \begin{array}{r} 162 \\ -84 \end{array} \quad \dots$	2分
乗法	I 基数×基数>10	$\begin{array}{r} 8 \\ \times 7 \end{array} \quad \begin{array}{r} 5 \\ \times 6 \end{array} \quad \dots$	1分
	II 二位数×基数>100	$\begin{array}{r} 65 \\ \times 3 \end{array} \quad \begin{array}{r} 38 \\ \times 7 \end{array} \quad \dots$	2分
	III 二位数×二位数>1000	$\begin{array}{r} 38 \\ \times 46 \end{array} \quad \begin{array}{r} 29 \\ \times 76 \end{array} \quad \dots$	3分
除法	I 二位数÷基数=基数	9)81 8)48	1分
	II 三位数÷二位数=二位数	5)185 6)348 ...	2分
	III 四位数÷二位数=二位数とあまり基数	26)1328 63)4349	3分

- (7) 各回の差の信頼度を検定すると、第一回と第二回、第一回と第五回では、信頼しうる差が見られるが、その他の場合には、概して信頼しえない。
- (8) 各回のA・B両テストの偏差値を表示すると、つぎの通りである。Aに練習効果の多いことは、記憶され易いこと、問題を理解するのに要する時間が節約されることなどがその原因としてあげられると思う。

計算問題と作業の相対的困難度

四 方 実 一

一、目的 基数+基数、二位数-基数、二位数+二位数、二位数÷二位数及び九九

の範囲の困難度の実験的研究はクラップ(Clapp)女史、武政博士、小田氏等によって研究されている。本調査は各算法相互の困難度及び同一算法内の各複雑段階に於ける相対的困難度を筆算に於いて求め、更に書字速度を引きき心算での困難度を見ようとした。

各回毎の偏差値

種類	施行回数	偏差値					
		I	II	III	IV	V	VI
A式	男	51	58	67	71	76	70
	女	54	62	68	74	78	75
	計	52	61	67	73	77	74
B式	男	55	64	68	68	71	71
	女	53	62	65	68	70	71
	計	55	62	66	68	70	71

第二表 加法、減法の速度比較

学 年	減 I		減 II		減 III		減 IV	
	加 I	加 II	加 III	加 IV	加 I	加 II	加 III	加 IV
4 年	1.27	1.25	1.46	1.42				
6 年	1.14	1.23	1.41	1.27				

(4) 加法 減法の困難度比較 加減は問題が逆になるように作ってある。速度を比較すると筆算では第二表となる。常に減法速度は加法より小である。又正確指数も減法は加法より低く問題が複雑になる程低下度が高い。

(5) 乗法の困難度 乘法 I は繰上る九九で、六年で

二、調査方法 問題は第一表である。

三、被験者 京都市の中央明倫小学校四学年四五名と六学年四八名について予備調査をした。調査は昭和二六年三月である。

四、結果の概要 調査結果の整理は各算法一題の所要時間を筆算速度として算出し、更にこの時間から書字時間を引いて心算速度とした。又総答数で正答数を除し、それに一〇〇を乗じて正確指数を求めた。

(1) 写字速度 写字速度は四年で一字一・九一秒、二字二・三三秒、六年で一字一・〇四秒、二字一・四三秒である。一、二字の差は各学年とも約〇・九秒である。

(2) 加法速度 加 I、加 II は同じく基数+基数であるが、II の繰り上る方が I に比し四年で一・九三倍、六年で一・八三倍となる。心算速度は四年で五・三倍、六年で二・九倍となる。加法 III・IV と問題が複雑になるに従って所要時間は増加し正確指数は低下する。

(3) 減法速度 減 I、減 II は同じく基数を引く基数が残る問題であるが II の繰り下る方が筆算で四年二・〇三倍、六年一・九六倍となり、心算で四年三・九九倍、六年三・五五倍となる。加法を同様問題が複雑になる程その割合より所要時間がかかり正確度は低下する。

第三表 乗・除法速度比較

学 年	除 I		除 II	
	乘 I	乘 II	乘 I	乘 II
6 年	1.84	3.19		

(6) 除法の困難度 除法 I は乘法 I の逆である。六年で三・七九秒かかっている。問題が複雑になると著しく時間を要し又正確度も大巾に低下する。

(7) 乘法、除法困難度比較 乘法 I・II と除法 I・II は逆の関係にある。速度を比較すると第三表となる。除法は常に乘法より時間がかかり問題の複雑になると著しく差を生ずる。正確度も同様著しく低下する。

五、結語 不完全な設備実験であるが、各算法内の困難度及び算法相互間の困難度は作業内容の複雑割合より大であり、又減法は加法より、除法は乘法より常に困難度は大であり、問題の複雑度はこの開きを更に大にする。

大学新入生の基礎学力について

安藤公平

大学新入生の基礎的学力を調査するため、新制中学三年程度の学力検査(昭和二六年二月大阪府教育研究所作成、抽出見本一、〇〇〇名の中学三年生に実施のもの)の中で国語、数学、英語の三科目について、本年度新入生に実施した。

学科目によって対象が必ずしも同一ではないが調査人員は次の通り。国語科一七四〇名、数学科一六六七名、英語科一四八〇名。

調査時期は六月。検査時間は各科目五〇分。実施結果を大阪府中学生の場合と比較しながら示す。次の通り。各科目とも満点に五〇点。

科目	項目	平均	標準偏差
国語科	(1) 漢字の書き方	二四・六七	一一・五一
	(2) 漢字の読み方	三六・四六	六・二七
	(3) 語意	一八・一七	一一・〇〇
	(4) 熟語構成	三四・八二	八・三四
	(5) 長文理解	一八・三〇	九・四一
	(6) 歌の鑑賞	三〇・九五	八・七二
	(7) 文・学史		
	(8) 品詞の弁別		
	(9) 語の活用		
	(10) 文章論		
数学科	(1) 四則計算	八三・三〇	五・九〇
	(2) 分数・小数・比	八〇・〇〇	五・三〇
	(3) 文字使用、比例	七三・〇〇	四・二〇
	(4) 方程式、等式	八四・〇〇	三・五〇

- (5) グラフ 六五% (三七%)
- (6) 経済事項 六一% (二八%)
- (7) 図形 六九% (三〇%)
- (8) 平方、平方根三角比 六〇% (三〇%)
- (9) 対称、回転、投影 六八% (二六%)
- (10) 数学的処理 四七% (二三%)

英語科

- (1) アクセント 八三% (四三%)
- (2) 語彙 七四% (四九%)
- (3) 前置詞 五五% (二一%)
- (4) 助動詞 六五% (四五%)
- (5) 時 四九% (三七%)
- (6) 文の構造 七六% (三七%)
- (7) 態 六五% (四七%)
- (8) 発音 七一% (四五%)
- (9) 綴字及び文法 四九% (一六%)
- (10) 書き方、読み方 四七% (二三%)

国語科については(4)熟語構成、(3)語意などの言語力において最も学力差が見られる他は、(1)、(2)の文学力、(5)(6)の読文力、(7)の文学史、(8)―(10)の文法などについては学力の進歩はあまり著しくはない。特に国文法に関する教育の不徹底を如実に示している。数学科においては形式的機械的なものよりも抽象的思考を要する(4)(9)(7)などが伸びている。英語科については特に表現力の面に著しい学力の欠陥が認められる。いずれにせよ基礎的学力の不足はあまりにも明かである。

T式道徳的判断検査

大平 勝馬

(一) 本検査の性格

複雑な要素をもつ道徳的行動の評価は種々の方法により総合的に行うことが必要である。本検査はかかる評価

Table 1.

	0	0.5	1.0	1.5	2.0	2.5	3.0	3.5	4.0	4.5	5.0	5.5	6.0	6.5	7.0	7.5	8.0	8.5	9.0	9.5	10	計	
個人	+1	+1	+1 -1		+1	+1 -1	+1 -1	-1	+1 -1	-1		-1											+7 -7
家庭生活					+1	-1	+1 -1	-1	+1		+1 -1	+1 -1											+5 -5
対人		+1				-1	+1	+1 -1	+3 -1	+1 -1	+2 -1	+1	+3 -1	-1	-1	+1 -1	-2				-1		+14 -12
一般社会									-1	+1 -1	+1	-1	+1 -1	-1	+1 -1	-2	+1 -1		+1				+6 -9
学校					-1		+1 -1		+1	+1	+1 -1	-1	+2 -1	-1	+1								+7 -6
その他					+1		-1																+1 -1
計	+1	+2	+1 -1		+3 -1	+1 -3	+4 -4	+1 -3	+6 -3	+3 -3	+5 -3	+2 -4	+6 -3	-3	+2 -2	+1 -3	+1 -3			+1			+40 -40

備考 +は善行為数、-は悪行為数を示す。

の一面としての道徳的な価値の理解と判断力評価に役立つ目的で作成した。サーストンの等現間隔法に基いて具体的な行動を+10—0—10の二〇段階に品等させる方法をとった。ダンラップ及び田中寛一博士が試みた方向である。

(二) 問題作成過程

予備問題は五年程前から研究してきた道徳意識の発達に関する資料に基き価値的に程度を異にすると思われる行動一二〇を選定し作成した。これを上記の方法で小学校四年以上三六九名、中学生五五八名、教師五二三名、計一、四五〇名にテストし統計的処理を経て各問題の価値判断平均値(尺度値)を決定すると共に、一定基準に従って八〇問を選定し本問題を作成した。問題は紙面制限上、別途の発表に譲りここの掲載は略するが、行動領域別問題数はTable 1.の通りである。

(三) 基準の決定

上述の本検査問題によって小学校四年以上中学三年生迄一、八九七名に実施した。整理は各問題に対する価値判断値を尺度値に照し二及びそれ以下の偏倚は除外してそれ以上の偏倚を調べ各人の合計を求めて標準からの偏倚度にした。この偏倚度合計の大なる者は尺度値から過小或いは過大評価を行える者であり、小なる者は尺度値に近い判断をしている者である。基準作成のため各年齢を六ヵ月区分とし各区分年齢層に含まれる全被験者の偏倚度平均値及び標準偏差を算出した。尚各年齢区分に含まれる見本被験者の平均年齢のかたよりを調整するため作製せるグラフ上において偏倚度を各年齢毎三・〇ヵ月一・九・〇ヵ月におけるもの(標準偏倚度平均値)に修正した。かくて得た各年齢別、男女別偏倚度平均、標準偏差、標準偏倚度はTable 2.の通り。本表に示す標準偏倚度とS・Dによって偏差値及び段階値算出を行うことにした。

(四) 結果の妥当性及び信頼性

Table 2.

性	要 項 年 齡 段 階	平均年齢	人数	偏倚度 平均値	標準 偏差	標準 偏倚度
男	11.0—11.5	11年2.9月	92	118.0	71	118.0
	11.6—11.11	11:8.4	44	116.5	70	116.0
	12.0—12.5	12:2.2	68	114.3	68	113.0
	12.6—12.11	12:8.3	106	100.0	60	97.5
	13.0—13.5	13:3.0	74	78.1	46	78.0
	13.6—13.11	13:9.2	72	62.8	38	63.5
	14.0—14.5	14:3.6	120	59.0	35	59.5
	14.6—14.11	14:8.0	106	53.5	32	52.0
	15.0—15.5	15:2.9	92	45.0	26	45.0
	15.6—15.11	15:8.5	86	43.8	25	43.0
女	11.0—11.5	11:2.6	70	135.2	70	135.0
	11.6—11.11	11:8.2	54	134.1	69	133.5
	12.0—12.5	12:3.2	60	130.0	65	130.0
	12.6—12.11	12:9.1	76	112.7	60	112.5
	13.0—13.5	13:3.0	78	99.8	48	99.5
	13.6—13.11	13:8.9	92	80.6	40	80.5
	14.0—14.5	14:2.9	100	71.1	38	71.0
	14.6—14.11	14:8.1	98	66.5	35	65.5
	15.0—15.5	15:2.8	70	57.1	31	57.0
	15.6—15.11	15:8.3	62	55.2	31	54.5

再検査結果の二度相関は中三年・802H・036折半信頼度係数は中三年で・935H・012である。個人の検査結果を五段階値に転換し教師の操行評定(五段階法)との相関を見ると、中一、二、三年全体で・401H・026となる。この値は検査性格上やむを得ないと考えている。知能との相関は中学三年男 $\rho = .566 \pm .054$, 女 $\rho = .402 \pm .075$ となった。

電信技手の適性に関する研究

大 協 義 一 年 一
高 橋 和 郎
朴 沢 一 郎
仙台電気通信学園の報告によれば一般智能及び学校成

績が共に普通以上の者を入園させるにも拘らず三ヵ月乃至六ヵ月後になると、その中に電信技術が必要な水準に達し得ない者があることが発見される。このような不適性なる者を早期に見出すことは可能であろうか。

この要望に答えんとして電信技術の適性検査法を編成せんとした。この技術の中心は単一の音の聴覚や或いは手指の運動にあるのではなく、連続する幾つかの音の統一的知覚と、それに対する幾つかの手指運動の系列との協応作用に存すると考え、先ずこれの性能を測定することが出来るような二種の検査法を試みに施行した。第一は音の系列の手指による模倣運動である。第二は音響刺激に対する簡単反応時間の測定である。何れも個人検査であって前者は実験者が電鍵で幾つかの長短音の系列合計十一を聞かせ、夫々聞いた通りに自己の電鍵を押すこ

とによって模倣させる。(音系列の種類及び持続時間を示す第一表を省略す。)

検査を試行したのは、(a)全く電信作業に経験を持たない十二人の中学生、(b)電信作業の経験ある者、更に是れを分ちて練習生十人、及び(c)その教官及び最高の熟達者五人、の三群である。

この検査の結果の得点は、未経験者の群は3乃至4点を得た者がその四十二%を占める。訓練生の群は5乃至6点を得た者がその四〇%を占める。教官の群は9乃至10点を得た者がその六〇%を占める。

この結果によってこの検査がほぼ電信作業の経験と密接な関係があることが確かである。そして技術の上達者と、未熟者との間に大なる差違が存在し、後者の方が得点が優れていることを以つてすれば電信の送信、受信の技術と密接な関係があり、かかる特殊性能の適性を検査し得る検査法の一つとして採用し得ることが知られた。但し、訓練生の中の成績の優秀者と普通以下の者との區別はこの検査結果には見出されない。

第二の検査である単一の音響に対する簡単反応時間は十回の検査の平均値を比較すると、電信作業の未経験者の群と経験者の群との差違が見出されない。寧ろ経験者の方が得点が劣っている。この結果からして簡単反応測定は電信作業の適性の測定には適しないことが明かになった。

この二つの検査の結果は、電信作業の中心が個々の音に対する個々の反応運動の迅速にあるよりは寧ろ幾つかの音の系列の統一的な群的捕捉と、それに対する反応運動の統一的形態化にあることを示すものである。

然しながらこれらの結果は各群の人数が小に過ぎるからして、その一般性の推計力は薄弱であるといわねばならぬ。吾々は近いうちに入園検査を行う時にもっと多くの志願者については是れを施行して検定しようと思う。

アンブル(注射液)の選別工に
試みた実験テストについて
(第一回報告)

東京都職業適性相談所

主旨 従来各製薬工場によって生産されるアンブル(注射液)は厚生省で一括検定されているが、工場毎にアンブルの良、不良の選別度が区々であるため、その検定が極めて煩しい。この報告は各製薬工場における選別工の能力を測定し、これによって何らかの選別規程を確立すべく厚生省の依頼により種々検討の結果、最初の試みとして、瞬間露出器に微点抽出テストで選別工の能力を測定せんとしたものである。

実施期間 昭和二六年九月以降現在継続中

実施場所 東京・大阪・主要製薬工場

対象者 選別工(女子)約一〇〇名

実験器具 ネチャーエラ式瞬間露出器

実施条件 I、テストカード 三種 一八枚

II、露出度 六〇度

III、視距離 五〇種

IV、照明 四〇W 電球二個

実施方法 テストカード(白地—黒点、黒地—白点、

白地—黒点)に散在している微点を瞬時的に見させ、その点の位置および数を一枚毎に整理票に記入させる。

結果の整理 テストの結果点の位置も数も共に正しかった場合のみ正解として一問を一点とし、一方各製薬工場にて良品と不良品とを配合したものを選別した資料により各選別工に序列が決められているので、テストの順位と選別順位との相関関係を考察した結果は次の通り。

A、三共製薬 I、テストと二五年一カ年平均選別

数とのr(列位差法による以下同)
N=20 r=0.487 P.E.r=0.109

II、テストと製品中不良品を選別した数の順位とのr

N=22 r=0.466 P.E.r=0.112

B、白井松製薬 アンブル選別(良、不良を検定させる)成績とテストとのr

N=5 r=0.716 P.E.r=0.144

C、塩の儀製薬 アンブル選別成績とのr

N=28 r=0.598 P.E.r=0.083

D、田辺製薬 アンブル選別成績とのr

N=8 r=0.687 P.E.r=0.128

E、大日本製薬 アンブル選別成績とのr

a. N=17 r=0.334 P.E.r=0.144

b. N=16 r=0.463 P.E.r=0.131

F、日新化学 アンブル選別成績とのr

N=6 r=0.415 P.E.r=0.226

G、実験テスト第I回と第II回とのr

N=15 r=0.517 P.E.r=0.127

大日本製薬において

ステノタイプピスト適性検査

の研究(第二報)特に適性

検査と熟達度評価との相関

八田卯一郎、本間武、松浦健児

安藤公平、渡辺徹

昭和二五年九月二〇日、同二二日および同二七日に最高裁が行ったステノタイプピスト選抜試験中に加えた適性検査の実施結果については同年秋の第一〇回日本応用心理学会大会に第一報として発表して置いた。同一二月練習生一〇名、採用がきまらな二六年一月から練習を始めた。ステノタイプが数人ほど揃って本式にその稽古をやり出したのが三月。この練習生の適性検査(B式知能I・言語理解V・書記知覚Q・運動速度T・指先器用F・聴取

H・書取D)の成績の内部相関rは第一表。この適性検査の内部構造を明にするためr値の高いものだけ指摘して見ると、IはQと^{3.5}⊕・四五七、Tと^{5.5}⊕・四二六、Vと⁷⊕・三八五。VはQと¹⊕・六八七、Hと²⊕・五二八、Dと^{3.5}⊕・四五七。QはDと^{5.5}⊕・四二六、Tと⁸⊕・二七一。TはHと¹²⊕・一八八、Fと¹³⊕・一七八。FはHと¹⁰⊕・二三〇、Dと¹¹⊕・二〇九。HはDと⁹⊕・二五一。また同じ一〇名について、この三月以降九月二七日までに、よりより実施した熟達度評価(技術教師総合評価[教評]・印字打速(二六年七月)[印打]・反訳時速[訳速]・反訳正確度[訳確]・基本語習得[語習])の内部相関rをγに換算したものは第二表。ここで教評というものは二名の実技訓練に当たっている教師の総合評価の平均順位である。まず教評は訳速と⁴⊕・九三六、印打と⁴⊕・七三六、語習と⁴⊕・五九〇、訳確と⁴⊕・一五〇で、訳確があまり尊重されなかったことがわかる。印打は訳速と⁴⊕・六〇八、語習と⁴⊕・四三六、訳確と⁴⊕・〇三一。訳速は語習と⁴⊕・四〇六、訳確と⁴⊕・一五七。訳確は語習と⁴⊕・四〇〇。前述のような適性検査の諸因子と熟達度評価の諸因子との間における相関値γは第三表の通り。各種の熟達度と相関値の高い適性因子Hは熟達度因子全部と⁴⊕で、もっとも高いγから挙げると、教評と・七四六、語習と・五八八、訳速と・五〇七、訳確と・五〇七、印打と・四九七。Dは訳確と⁴⊕・八三二。これは両因子作業のすこぶる類似していることを示す。他に⁴⊕は印打と・〇三一。⊖で、語習と・四四六、訳速と・四三六、教評と・二六一は要注意。Qは訳速と⁴⊕・六二八、語習と⁴⊕・三六四、印打と⁴⊕・二二九、教評と⁴⊕・一二五、訳確とは⁴⊕・〇三一。Vは⁴⊕、訳確と・五九八、語習と・三七五、訳速と・二八一、印打とは⁴⊕・二二九。Iは⁴⊕で、語習・四六七、訳速と・三八五、他は⁴⊕も無に近い。

Tは⁴⊕、印打と・一三六だけで、他は⁴⊖訳確と・五一

七、語習と・三九五、訳速と・三〇二。教評と⊕は⊖
・〇八三。Fは熟達度諸評価と⊕は訳確、語習だけ・〇
七三、他は⊖、印打と・六九七、教評と・三五四、訳速
と・一二五。別に性度は適性を性格面から見ようとする
もので、印打と⊕・四九七は要考慮。訳速と⊕・一七七、
訳確と⊕・〇三一。⊖は語習と・一七八、教評と・〇九
四。以上、検査人数が少く、P・Eもまだ計算してない
が、ステノタイプピストの適性が那邊に存するかは少し見
当がついたかと思う。

啄木のパーソナリティー

木村 禎 司

パーソナリティーの研究に日記、書簡、作品等の個人的
記録が利用されることは誰しも考えることであるが、そ
れをどう利用するかはまだ十分に考察されていない。あ
る個人についてその記録に同一の性格特徴が反復して表
れているような場合にはそうした特徴が存在したと推定
し得るであろう。そうした頻数の比較的多いものとして
わたくしは啄木を選んだ。なおそのほかに啄木が性格研
究の対象として好都合だと思われる点も二、三あ
る。ゴルトンは性格の研究にはその個体を危機にさらし
て、その反応を見るのが良いといったが、その点啄木は
短い生涯に幾多の危機に遭遇してその性格特徴を暴露す
ることが多かったことであり、第二に啄木は内省に長じ
自己を客観化することに努めたことがわれわれに幸す
る。そのほか作品や記録が比較的揃っていて、われわれ
にも理解し易く、接近し易いと思われるのである。G・
オールポートはパーソナリティーの研究は熟知している人
から始めるようにと云っている。そこでわたくしは上記
の日記、書簡、作品等のうちから啄木のパーソナリティー
を表わしていると思う箇条を抽出し、それをオールポー
トの「心誌」にあてはめて見たのである。もちろん数量

的の正確は期待し得べくもない。しかし大体の評価をし
て、なんらかのプロファイルが得られるならばそれで満足
する。なお啄木自身の記録のほかに金田一氏著「石川啄
木」が参照された。

例えば体格については、その均整のとれた体格は写真
でも金田一氏の記述でも明かであり、健康についてはそ
の日記に徴兵検査の結果が記載してあって、筋骨薄弱、
丙種合格としてある所から察せられる。ただ活力は大体
元気で、時には意気軒昂たるものがあつたことから、概
して活気があつたように思われる。知能のうち抽象的

(言語的)知能の優秀であつたことは詩文からも、また
彼が少年時代神童と呼ばれたことからも云えると思う。
機械的知能も模倣にたけていた点からある程度すぐれて
いたことと思われる。気質では情緒の広さは同情とか、
その他の行動からその頻数によって知られる。ただ情緒
の強度は頻数では分らぬので、精神電気反応とか血圧に
よるほかないが、それが出来ないとするれば怒り易かつた
ことや喧嘩をよくやった事などから推定するのだが、こ
れは正確にはいれない。表出的特徴では支配性、拡大性
は強く、固執的よりも動揺的であつたように思われる。
態度的標徴では外向内向では内向に傾き、対自的態度で
は表現・信頼ともに強かつたと思われる。対社会的には
利己的な所が強く、一方に孤独を求めながら、群居を好
み、社会的知能は他の知能同様高かつたと思われる。対
価値的には審美・理解に高く、経済に低く、政治は関心
はあつたが(特に晩年)実行に移つたのでなく、宗教は
否定的ではなかつたかと思われる。なお啄木は早熟の天
才と一般に言われているが、情緒的には利己的なところ
や子供らしい所が多分にあり、情緒の成熟はむしろおく
れていたのではあるまいか。

啄木のパーソナリティーを複雑にするものにその家庭環
境があり、母と妻と彼との間にリビドーの葛藤のあつた
こと、経済的に困窮したためにその本来の姿がゆがめら

れたと考えられる点もある。しかし短い生涯の間に困難
に耐えてパーソナリティーの成長したことも驚嘆に値する
ものがある。

補填緊張法、改訂クレペリン法、 改訂ロールシャハ法、領域交叉法、 戒律品等法の発表

阿部 孫四郎

性格指導の問題は性格の評価法と指導目標とにある。
性格評価の現状は単一検査に止まり多角的総合検査が行
われていないのみでなく、うけ売り主義で創意と批判性
に欠けるうらみがある。今日一流大学の指導スタッフが、
性格問題に限らず、多くは外国文献の紹介と追試とに研
究を拵づけているが、こうした植民地的学風にわたくし
等はあきたらない。

性格評価で知能を第一とする風潮は性格指導の実状に
合わない。そこで補填緊張法を創案し、クレペリン法と
ロールシャハ法を改訂してその補助とした。性格認識の
主観性が客観性と同等以上に強いという現象、補填緊張
を発見したのを手掛りに、指名された六名の好きな人と
嫌いな人とに、具体的な自我の属性を投射せしめるのが
補填緊張法であつて、性格が抽象的術語によらずに具体
的な俗語の複合として握まれ、しかも向性指数と両向性
指数が求められる。クレペリン法は内田式では休憩効果
が無ければ異常として、唯一回の休憩で片づけてしま
うが、休憩を二回にすると、先きに下つたものでも上り、
上つたものでも下るのがあり、しかも作業は一分型でな
く三〇秒型にしても行数さえ多くすれば曲線が同様に
なる。曲線の質の判定と量の判定とは、加算の抽象的処理
なしに曲線のまま行うのが当然で、その為にそれぞれ
五つずつの基準を立てた。ロールシャハ法は臨床的訓練
が前提で素人向でないから、普及と理論化とをねらつて

まずその指数化をやり、柔軟性指数と統合性指数とを立て、レヴィンの性格学にもとづき異常容疑者限界指数をそれぞれ定めた。

性格指導の目標には理想性格のために領域交叉法を、適応せしめられる社会の集団性格のために戒律品等法を作った。修身科的理想性格は天降りであって被験者に足をすえてない。そこで現実の自我を仮寓者とする理想性格の交叉につき、評語間の相関係数によって理想性格を析出するのが領域交叉法である。又集団性格はトポロギ的には戒律品によって定まることを根拠とするのが戒律品等法であって、この集団性格の研究を抜きにして社会適応というのでは社会の集団性格の欠陥をそのまま身につけた性格が出来上る。精しくは阿部著「性格調査法」四版、奈大教育研究所発行。

特殊学級入学後の児童の行動変化の考察

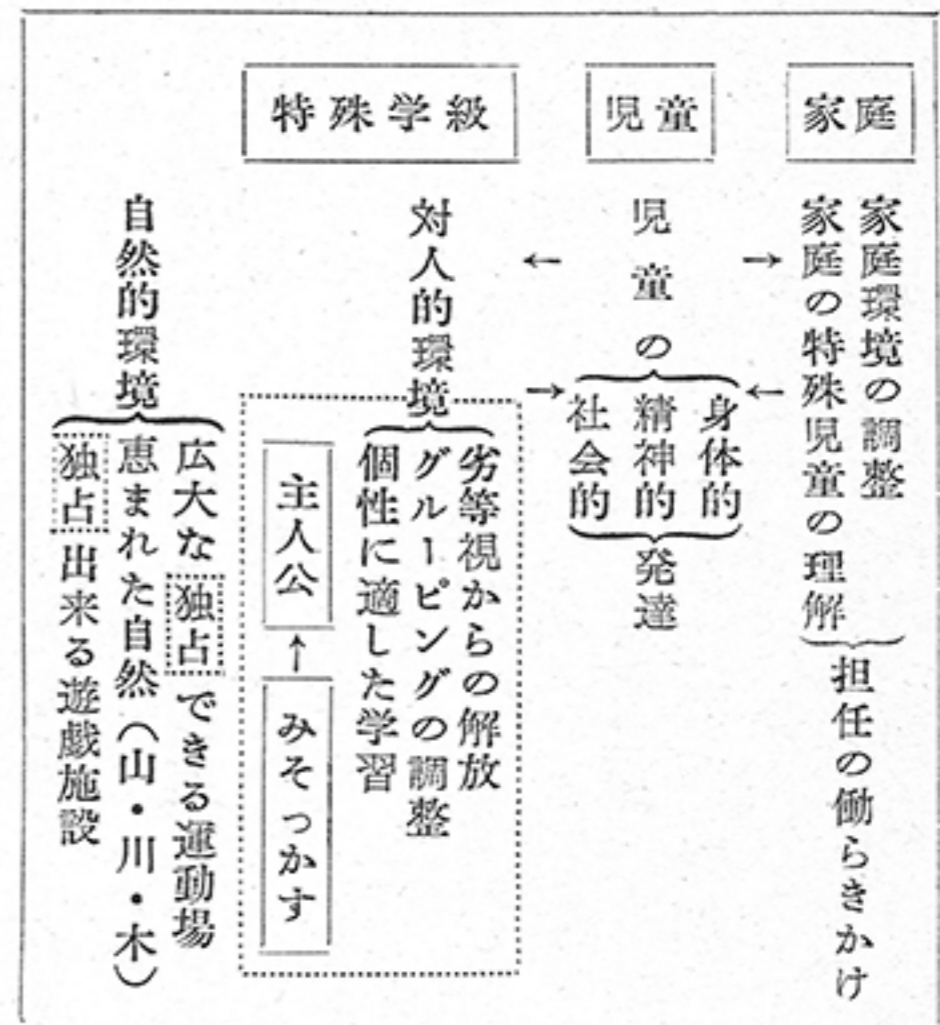
林 田 広
斎 藤 義 夫

ここでいう特殊学級とは、杉並区立落美教育研究所の促進学級および補助学級のことである。入学児童は各学級とも十五名で、I・Qは四〇以上一一七の者まで入っている。

児童の行動を変化せしむる条件として考えられるものには種々なものがあるが、中心的条件は下の第一の表に示してある通りである(点線枠内)。

児童の変化の時間的推移を概括すると、下の第二の表のようになる。第一期は、新入生の緊張感による静寂だが、まとまらない時期である。第二期に入ると、友人の同列を発見し、反動的に喧騒を極めるが、第三期に入ると次第にグループ、序列も定まり、心的解放も飽和に達しておちつきをとりもどし、学習に入ってくる。

期名	緊張期(警戒)	解放期(ほごみ)	安定期(指導)
期間	入学後→2週間	2週間→1学期	2学期以後
児童の行動の特徴	静寂 他人行儀、 グループ未形成	雑騒 (悪口、悪ふざけ、 甘える、けんか) グループ}ほぼ形成 序列	おちつき 反省的 解放の飽和
教師の取扱い	登校の motivation, 観察	調査, 観察指導	指導, 観察



次に児童の家庭を通して無記名で入学前に入学後の児童の行動を比較させた。この結果は、常識的ではあるがかなり信頼してよいようである。それによると、

- (1) 前の学校に比べて学校に対して好感をもつ様になった者八九%で、変りない者一一%
- (2) 学習態度も積極的になり、遠足や運動会の行事を喜ぶようになった。
- (3) 交友関係も日常生活も明るくなり、よく家庭の手伝いなどする(約七〇%)。
- (4) 性格的には自信をもち外向的となり、健康も著しく増進した。これらはすべて、劣等感からの解放、個性に適した指導が効を奏したものと思う。
- (5) しかし反面、理窟をいうようになり、けんかも増した。心理的には自己主張の現れで喜ぶべき現象と思っている。
- (6) 総合的には殆んど全部の者(九六%)が前の学校よりも幸福そうであるとみている。

特殊児童の行動変化のグループ・ダイナミックス的考察

玉川悦子

- 一、この特殊学校の構成
- 1、促進級児童
- 2、IQの高い性格異常児
- 3、精神薄弱児
- 二、新しいソシオグラム製作までの経過
- 1、普通の好悪関係のみ表現するもの
- 2、右の外に

肯定的関係
否定的関係

グループ関係

を明示出来るものを考案した。

第三案

3、第二案に加えるに

グループ肯定関係
能動的
従属的

特殊な孤立者。ボスやリーダー。

を表現し学級の動的变化、児童の行動変化をダイナミックにとらえて明示出来るものに改良した。

三、第三案により男女二名の児童の行動変化をグループ・ダイナミック的に考察したものを表現して二列を説明する。

(1) Y.K(男) C.M=10:11 鈴木ユネー I.Q=92

田中B偏差値=52 極端な内向行動がノーマルに変化し普通学級復帰に到るまでの経過を動的に力学関係からとらえてみる。

(2) J.K(女) C.M=8:6 鈴木ユネー I.Q=102 田中

B偏差値=31 不安定な異常行動と子供の社会の圧力関係について。

精神薄弱児・学業不振児の

社会的生活能力の研究

斎藤 義夫

本研究に用いたテストは牛島義友氏が Vineland の Social maturity test を参考にして作製し標準化したものである。I.Q.との比較に用いた知能検査は鈴木ビネー式を用いた。被験者は特殊学級の児童三〇名である。調査方法は家庭訪問と日常生活の観察との両方を併用した。

社会的発達年齢(Social age)と担任教諭の判定による

S.A.との間には——数量化は難かしいが——一致度が高く、このテストの妥当性は相当高いものと考えられる。

I.Q.とS.Q.との相互関係数 0.735, 信頼度 0.057となり相関が非常に高いことを示している(但し牛島氏の調査では乳幼児精神発達検査との相関は $r = 0.591$, $P. E. r = 0.067$ である)。I.Q.と著しい相違のある児童、例えば S.Q.の方が高い児童は躰けのきびしい家庭の子で、著しく低い児童は性格的に欠陥のある子である。I.Q.85以上で S.Q.も略々同等な子は特殊教育の必要性のない子で三名が既に普通学級に復帰している。

I.Q.85を以つて学業不振児と精神薄弱児とに分け、両者の I.Q. × 100 の平均を比べると 99.4 対 84.4 となり、これを Non-parametric method

$$(M_1 - M_2) > 2 \sqrt{\frac{S_1^2}{n_1} + \frac{S_2^2}{n_2}}$$

によつて検定すると5%の危険率において有意の差がある。このことは学業不振児というのは知能は高い割に生活能力が低い即ち全人的能力において劣っている者であることを意味することを考えられる。

長子・末子・一人子と兄弟の中に育っている中間児と S.Q.を比較すると平均値 92.3 対 93.3 となり殆んど差が認められない。

家庭の経済状態による分類、即ち貧困家庭の児童と中流以上の家庭の児童とを比較すると、平均値においては 98.5 対 90.5 となり差があるようであるが、この差を検定すると有意な差とはならない。

性格異常児と単純劣等児とを比較すると 99.7 対 78.5 となりこの差は有意な差となっている。即ち性格的に欠陥のある子供は社会的成熟度は知能的発達に比して著しく劣っていることを示している。その理由は社会的風習や長上の教示に従わないことによるものを、ある種の欠陥児においては社会的生活において低能力であることによると判断される。

最後に家庭の教育的環境の質的分析によつて S.Q.を比較すると、躰けのきびしい家庭、家庭作業によく使役する家庭の児童は高く、溺愛又は放任の家庭の児童は S.Q.が低くなっている。この両群の平均値 101.0 対 90.7 の間には有意の差がある。これらの環境別児童を問題別に成就数を調べると明らかな差が見られる。

精神薄弱児の合宿による生活教育

玉井 収介
石井 哲夫

一、合宿の目的 前年度の合宿の結果「教師が親代りになつて子供同志の助け合いによつて生活集団をつくること、かゝる子供たちにとつて最良の生活集団である」という結論が出た。(児童心理と精神衛生、二五年四号、石井哲夫・津守真)今回はこれを検証することと、海という新しい事態にいかに対応してゆくかを見ようとした。

二、合宿の概要 七月十六日より三班にわけて十日間ずつ、神奈川県横須賀市の馬堀海岸で行った。一班は七・八名ずつ。指導員は男女四名。日課は——七時起床、整頓、洗面、散歩、十時——十一時半水泳、昼食後——ひるね。三時半——五時水泳、終つて入浴、夕食。八時就寝。

三、観察事項 親からはなれた反応。ホームシックは一、二名みられたが、世話がゆきとどけばおこさない。

グループピング。平常にくらべて男女の別がはっきりしてきた。細かい点は別図の通り。しかし九月以降はまたもとにもどつた。

海に対する態度。低い子ほど海を恐れることが多かった。

四、効果 偏食の家庭より少なかったものや、平常

弁当をたべなかつたものが、食べるようになってきた。

五、将来への考察

学校生活からはみられない点を見ることができたし、前年度の結論も大体確認された。学校で行っている生活教育は十分有効であることがわかった。

【註】この報告の学園は旭出学園(東京都豊島区目白)であり、この合宿の指導員は、石井哲夫・玉井収介・坂本豊子・橋本美代子・浜田卓子である。

神経質検査標準化の試み

安藤 公平
島田 信義
矢野 幸和

同一の人間に於いても種々な原因で神経質度に変化を来たすものである。しかしながらこの神経質度の測定は非常に難しいものであり、又如何なる方面に神経質であるかと云う点に於いては現在まで全くその研究をみないと云っても過言でない。私等はほぼ等価値を有すると思われるA・B二形式の質問形式による検査法を考案して、その神経質度の測定を試みたのでここに報告する。本研究に云う神経質とは、日常我々が言いなれている神経質で、決して精神病的なものを意味するものではない。

神経質等価値尺度の作成に關する予備調査として、サーストンの質問紙の二二〇問より、適当と思うもの二〇〇問を選び、これに多少の改訂を行って東京都内男女大学生三七〇名に実施した。その結果は得点の最高得点は一四三点で最低得点は一〇点であり、平均点数は六九・三四点で男女ほぼ同一の値を示した。

いま三七〇名より得点数の高いU群及び低いL群を二七%ずつとると、各群は一〇〇名となる。予備調査二〇〇問の各項目の妥当性を知るために、L群、U群により妥当性指数の算出表を用いて、各項目の妥当性を検討し

た。しかしして二〇〇問中より妥当性指数の高いもの一〇〇問を選び、これを健康性二七問、社会性二二問、情緒性五二問として、これ等を別々に高指数のものより交互に二群に分配し若干の交換を行って、ほぼ等価値と思われるA・B二形式の質問紙を作成した。

このA・B二形式を五〇〇名の大学生に実施して検証を試みたところ、A・B両形式の各得点分配曲線はほぼ同様であり、また健康、社会、情緒の各質問群別の得点分配曲線もほぼ同様な頻度を示している。A・B両形式の相関係数は0.833で一応の目的を達した様に考えられる。

いまA・B両形式で総数五〇〇名の測定を行い、その得点を「1」より「8」にいたる数を以って表わすと、最高頻度を示すものはA形式では「3」の一五五名であり、B形式では「2」の一七七名である。同様に健康Hを「1」より「10」までに区分すると、A・B両形式共に「4」が最高頻度を示す。社会Sに於いては「1」より「8」に区分するとA形式では「3」、B形式では「4」が最高頻度であり、また情緒Eに於いても「1」より「8」に区分すればA・B両形式共に「3」が最高頻度を示す。

以上を総括して考えると一般成人の神経質はA形式ではH・S・E=4・3・3、B形式では4・4・3なる数字を以って表すことが出来る。これを私は神経質式と名付け、今後この標準化された神経質式より病的な人々の測定を行ってその神経質度の変化を研究致したいと思う。

一般入犯の仮性痴呆と

そのアミバル面接の効果

原 俊夫
高橋 進

私共は一般入犯のいわゆる拘禁性反応としてのガンゼ

ル状態又は仮性痴呆状態を観察し、これにイソアミルエナルバルビツール酸ソーダ、即ち邦製アミバルの静脈注射を行った。

仮性痴呆状態は、成書に記されているが如く Nightingale と同意即答症が著明で、全体として小児様態度、小児様爽快が認められ、犯行に対しては健忘を示した。

これにアミバルの少量(容0.2gr)を注射すると、小児様態度消失、智能回復が急激に現れた。しかしこの効果は一過性で、長くて一二時間以上は継続せず、又かかる意識清明状態に於いても犯行は否認した。

私共は詐病との区別の一試みとして、精神電流反射を注射前後に行ってみましたが、両状態とも、犯罪に關する刺戟語に特に強く反応し、やはり詐病との区別は困難であった。

しかし私共は、仮性痴呆状態は、やはり一つの疾患として考えたいと思う。

頭部戦傷者の精神異常に就いて

(抄録)

矢野 正敏

Binswanger は頭部外傷直後に意識喪失、胆妄、健忘の三時期を経て治癒する精神異常を第一次外傷性精神異常と称し、これに続発するか、一定間隔を経て、週期的抑鬱状態、性格変化、精神発作を屢々伴う癲癇を發呈する様な場合を第二次外傷性精神異常と称している。

私は下總療養所入所患者の中、第二次外傷性精神異常に屬すると思われる者多数を観察しこれ等の患者が脳外表を単に障碍された様な場合には、運動感覚麻痺癲癇等を表すのみであるが脳底深く損傷したり、脳性傷の傾向の強い者に、数年に亘って、精神衰弱、週期的喝酒、性格変化、抑鬱等の症状を呈するのを見た(八八名)。然るにこの外二〇例(四%)に典型的の精神分裂病様症状を

呈した者が有ったのでこの中三例の破瓜、緊張、妄想型を發した典型例を詳述し、他を表示する。

(1) 黒岩 右前額左側頭骨貫手榴彈破片創、破瓜病、顔貌弛緩、猛語、徘徊癖、當意即答、衝動的暴行、思考分裂、痴呆を主症候とする。

(2) 吉田 左側頭部顱骨骨折擦過銃創、解剖により左側頭回に矢状方向に走る脳癥痕萎縮を認む。緊張病型。性格変化、顔貌強梗、衝動的暴行、破衣、自傷行為、考慮阻碍、音楽幻聴、痴呆なし。

(3) 木下 脳衣挫傷、省電に衝突し耳鼻より出血せり。

妄想性痴呆型を呈した。

被害妄想、幻聴、幻視、痴呆を後遺す。

古来精神分裂病の如き精神異常を頭部外傷後に繼發する際、Paul, Grunthal の如く外傷が直接分裂病惹起の原因となると見做す人と、性格変化は別として Kleist, 三宅の如く、脳外傷後に發生した分裂病は本人の素因によつて生ずるもので全く別個のものであると見做す人が有るが、私は發生頻度が頭部外傷者全体に比して著しく少い事より推論して、癲癇、性格変化、神経症、外傷性痴呆の發生は前頭葉側頭葉、脳底近傍の損傷に直接關係があるが、精神分裂病の發生に關する限り後者の説の如く分裂病の素因が予め存する者に頭部外傷が単なる一誘因を形成して發するものと考えたい。但し分裂病を誘發する脳外傷の箇所は、私の例に於いて悉く前頭葉か、側頭葉か、頭蓋底部挫傷である事と Soniat の云う様に脳腫瘍の際にもこの部の腫瘍に幻覚や精神分裂病と誤る様な症候を發する事の多い点より見て、前頭側頭底面や脳底部の損傷、恐らくは間脳部の衝撃が分裂病發生の誘因を形成すると考えたい。

精神異常者の「色彩反応」と行動特徴

三木清子

目的 精神異常者の外界への感情的接觸の度合を研究する一つの手段として、精神異常者の中、ロールシャハテスト施行の際に色彩反応を多く示す者には、そうでない者に比し、一貫した行動特徴があるか否かをみる。

方法 早稲田大学改訂ロールシャハ検査図版を用い、その採点法による反応總数に対する色彩反応總数の比を求め、その比が略、平均の三十%以下と以上の二グループに分ける。各グループに、田中B式知能検査、田中式向性検査、内田クレペリン加算作業検査を施行し、二グループを比較してその差を検討する。

手続 被テスト者二十二名。慈雲堂病院入院中の精神病者。男九名。女十三名。色盲なし。分裂病十六名。操病三名。鬱病一名。てんかん二名。分裂病の中、盲想型六名。破瓜型八名。緊張型二名。色彩反応少きもののグループ十四名。多きもののグループ八名。

結果

- 1、色彩反応多きグループ(三十%以上の者)には向性指数一〇〇以下の者はない。向性指数有意的に高い。
- 2、色彩反応多きグループの知能点の平均は、他のグループの知能点より有意的に低い。
- 3、クレペリン加算作業曲線において、興奮因子を著しく示す者が多い。
- 4、色彩反応多き者のグループには、医師の診断に於いて、操病、てんかん、分裂病を含むが、分裂病の中、破瓜型、緊張型を含み、盲想型の者はいない。

結語 ロールシャハテストへの反応として、色彩反応が平均以上に多い者においては、平均以下の者に比して

向性指数高く、知能点低く、作業曲線に於いて、興奮因子を著しく示す者が多い。医師の診断による操病、てんかん、分裂病を含むが、分裂病の中、妄想型の者はいない。

以上の特徴は何を意味するかは、今後検討したいと思う。

失業の原因に関する調査

藤本喜八

(一) 調査の対象 都内の二職業安定所の失業保険受給者中、二十五才以下の男女各五〇名。

(二) 調査者 報告者及び学生(市川竜造)。

(三) 調査方法 面接法により、年令、家業、家族關係、學歷、職歴、失業の原因、職業指導をうけたか、就職の紹介者、退職の理由、今までの職業に対する態度、次の職業への心構え、次の職業への希望条件と求人条件との調整、失業保険及び失業救済に対する理解、など九項目。

(四) 調査時期 昭和二十六年七月末〜九月初、調査結果次の通り。

(1) これまでの転職の回数は、一回のもの(男一七、女一〇)、二回のもの(男一四、女一五)、三回以上のもの(男一一、女一一)。転職の理由は、男子ではより高い賃金への移動、終戦、解雇、自発的退職、家事都合、将来性なし、先輩との対立の順、女子では解散、家事都合、より高い賃金へ、空襲、引越、餓首の順であった。(三回以上転職したもののケース二例及び低知能のケース一例は口頭で説明。)

(2) 失業の直接原因については、いうまでもなく工場閉鎖又は事業縮小によるものが圧倒的で、男女とも各二十四名(約五〇%)であった。それに次ぐのは、男子では、賃金待遇、将来性なし、餓首上役との關係、進学、

家事都合、病気の順であり、女子では、結婚、家事都合、同僚関係、上役との関係、その他(賃金待遇、将来性なし、誠首など)である。

(3) 男子の「誠首」は四名で、内二名は組合運動のため、一名は夜間通学のため残業を断ったため、他一名は「自己の責任」と答えたのみ。女子の一名は、祖母の看護で無届欠勤一カ月のため。

(4) 男子の「進学」は三名で、女子は〇で、特徴的であった。

(5) 「上役との関係」は男子三名、女子二名で、常用工と臨時工との差別、組合の結成妨害などであった。(ケース二例は口述。)

(6) 「同僚との関係」は男子〇、女子三名で、女子に特徴的なケースであるが、ひがみ、告げ口、古参者の意地悪、などがその原因であった。

(7) 以上のうち「上役及び同僚との関係」は、労働意欲の妨害条件を形成するとこの、いわゆる人間関係を示唆しており、男女七名は、産業における Counselor の必要を提言した。

(8) 終戦前に学校を卒業した者と、終戦後に学校を卒業した者とに分けて、在学中どんな職業指導を受けたか、その効果如何を確かめようとする意図は全く失敗であった。彼等は殆んど職業指導をうけなかったから。然し、これまでの就職は、経済的理由(男一四、女一二〇)が圧倒的(この外に、学資を得るため、男一〇、女一あり)自分に適するからと言ったのは、僅か(男一二、女一四)であったが、今度は是非自分に適する職業をとるものが圧倒的(男女計八一名)なのは、当然の成り行であろう。

保護少年におけるT・A・Tの研究

樋口 幸吉

精神薄弱、精神病質人格その他の精神障害を有する

二二名の犯罪少年にT・A・Tを試みた。

彼等の罪質は大部分が窃盗であるが、強姦、暴行の如き性犯罪、継母に対する心的葛藤による傷害、物品淫乱症的窃盗をも加え、現代アメリカ犯罪心理学が好んで対象とするような問題の事例を被験対象とした。

得られた説話の整理方法としては、Bellakが、夫々の絵について一般に起り易い、問題となる特徴的テーマと内容が我々の場合に現われる割合を求めた。その目的はKutash, Wells等が精神病質犯罪者や非行少年に対して挙げていた種々の特徴と我々の場合を比較すると共に、T・A・Tそのものの一般的有効性を考究することにある。その結果を総括して要約すると、

1、説話の形式としては文章構造が貧弱で断片的であり、思考や空想の発展性が乏しい。

2、「主題」において同一化が起り難く、自己告白的内容が少い。感動や心的葛藤の投射を回避したり、その表現に抵抗がみられたり、時に心理的加工が起り、保護少年の自我構造やその力動性に対し重要な示唆が得られず。

3、内容的には解釈に独自性が乏しく、常套的になり易い。時に moralization も起る。情緒的色彩としては抑鬱、悲哀、不安、罪悪感、攻撃性等も投射されるが、形式的で深刻なものは殆んど見られない。

4、絵と被験者との間、説話中の人格間の緊張が乏しく、感情の伴わない平淡なのが普通で、以上の傾向は精神薄弱程顕著である。

5、犯罪原因としてアメリカで特に問題としている両親や同胞に対する家族関係や、犯罪者の素質的傾向として重要視されている同性愛的傾向は解釈においてかなりの距りがみられる。

これらの結果から、1、アメリカで作成された検査材料をそのまま使用することにより生ずる問題。2、日本人とアメリカ人の保護少年における表現態度の相違。

3、両者の反社会性人格構造の相違等に重要な課題が見出されると共に、これらの成績より更に meadow 等により試みられている比較人類学的研究方向に興味ある示唆が与えられる。

非行少年の嘘言について

田浦 浩
松下 康夫

一、研究時日及場所 於 多摩少年院(昭和二六年十月十日—二六年十一月五日)

二、研究の目的 現在迄のところ非行少年の嘘言について科学的解剖を試みた例も少く従ってその常習者に対しては殆んど合理的矯正措置もとられていない。吾々はこの問題について色々の角度から検討し先ず其の成立の理由を調査し矯正方法を発見することを究極の目的とした。(現在調査の段階にある)

三、研究の方法 日常の観察、質問紙法、問診、面接等を併用し裁判所、鑑別所、少年院における諸記録を参考とした。

四、研究結果の整理 出来るだけ多くの実例を集計し且つ非行少年自身の解答により Loutitt の分類に基づく分布が病的状態にあるものを除いて殆んど全部存在することを明らかにした。彼等の解答のうち比較的信頼出来ると思われるものを集計すれば別表の様な結果が見られる。即ち嘘言の時期、環境、対象に就いても社会的圧力に抗する一種の努力が為されている事である。その事は同じパーソナリティを全く異った現生活(少年院生活)の場面に置き換えたとき同じような結果が得られる事からも云える。そこで吾々は代表的「ケース」を取り上げることにより嘘言傾向に対する以上の提起を内容的に裏づけようとした。常習者の選定に当っては生活指導、実科指導、教科指導を担当する六名の教官の推せんが一致

したものを更に記録と対象し本人と面接のうえ九名の「ケース」を得た。それ等九名について得られた各種データは別表の通りである。即ち吾々が得たのは、知能、家庭環境、生育歴、心情質傾向、社会適応傾向等の各項目で主として質的解釈に重点をおいている。

五、結論 本研究は勿論その緒についたばかりでそれなりの報告しか出来ない過程にある。しかし一応以上を要約すれば一つの方向が見出せるかも知れない。

(1) 非行少年の嘘言には社会的圧力に基づくものが多い見られた。社会圧力が同等の場合、子供は当然大人よりも不適応の状態にはいるわけで特に精神薄弱、性格異常の傾向にある非行少年に就いては要求不満や欲求阻止の代償的行為として嘘言と云う逃避手段が用いられることとなる。

(2) 嘘言常習者の嘘言発生は殆んど不健全な家庭環境に見られ多くの場合不均衡な愛情分配が一方的に要求不満となり例えば溺愛された母親を欺くような感情的行動となって現われている。

(3) 将来の方針として非行少年の社会環境や嘘言常習者の家庭環境を機能的に追求することにより要求不満や適応性の問題としてその矯正方法を行動力学的に解決したい。

少年不良グループの一例

青木 孝雄

城東方面某地区に発生した二名の女子少年をめぐる輪姦事件である。昭和二五年九月より、約半年にわたるもので、関係者は一五才より二二才まで、二八名になっている。

江東方面の同様なグループとの比較から、境界地域の危機を見出し、事件関係者の補導と共に、かゝる傾向をもつ地域の指導者に参考資料とする目的をもっている。

内容の目次は次のとおりである。

一、事件の概要

二、女性Aの鑑別結果

三、女性Bの鑑別結果 (A・B共に精神薄弱者と見做し得る。)

四、関係者の鑑別結果 六名の運動者であり、且つ輪姦と単独とを併行したものを対象一とし、三名の単独一同のみのもを対象二とし、一九名の輪姦のみのもを対象三とした。知能(田中B式)、性格(三宅式性格表徴法、野間適応性診断テスト、フェイスター氏性格テスト)及び家庭環境を調査した。

五、発生地区の社会集団 風潮、慣習、その他、社会集団の分析を試みた。

六、世代の相剋 阿部教授領域交叉法、親との座談会、青年との座談会、中学三年生職業興味調査等より、世代の相剋をとりあげた。近代社会の不安の反映をみる。

七、江東方面に於ける不良グループとの比較。

八、対策 指導者と青年会の活用、たてなおしによつて、境界地域である地域社会の崩壊を防止することを強調した。

九、予後 日本農村と、都市との関係をめぐる、大問題をふくみ、前途は甚だとおいが、予後は必ずしも悲しむべきもののみではない。

以上、警視庁少年二課に於いて、行っている仕事の一端をとりあげて、みたものである。

尚、当課の機関雑誌「青少年」に近く内容のすべてを發表する。

双生児に関する一研究(第二報)

中村 弘道
中島 昭美

〔目的〕 双生児に(1)内田クレッペリン作業素質検査、

(2)淡路式向性検査(自己評定用)を施行し、更に(3)各対偶者間の学業成績の比較と(4)その属する組の Socio-stram を作つて双生児の社会的地位の検討をすることに より性格形成の諸条件を明かにせんとした。

〔方法〕 被験者は(1)内田クレッペリンの作業素質検査においては東大附属中学校の生徒一三組(何れも一卵性)と昭和二七年度、附属中学校に入学を希望した四〇組(一卵性二一組、二卵性一九組)との合計五三組であり、(2)向性検査、学業成績及び社会的地位の検討においては附属中学校の一三組と二七年度入学を希望した四〇組のうち四組との合計一七組(何れも一卵性)である。

〔結果〕 上記の方法により

(1) 内田クレッペリン検査の結果において、両者共に定型で作業量も曲線型も同じようなもの及び非定型であっても同じような作業曲線を有するものは二卵性より一卵性に多く、それに一方が定型で他方が非定型なもの及び両者共非定型で曲線傾向の異なるものは二卵性の方が圧倒的に多い。即ち内田クレッペリン作業検査成績において一卵性双生児は二卵性双生児に比較して遙に高い類似度を示す。

(2) 向性指数、学業成績、社会的地位においても一卵性双生児は高い類似度を示す。

(3) 以上の結果の如く、一卵性双生児は、その性格において各種の性格検査の結果が示すように極めて類似度の高いものであるが、一つの検査の結果から一義的に結論を下すのは危険であつて各種の検査を総合してその上で診断上の結論を下すのが一番適當と考えられる。